

かみ しん かい  
上 新 開 遺 跡

Kamishinkai Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書34

2006

宮崎県埋蔵文化財センター

# 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した上新開遺跡は、平成14年度から平成15年度にかけて発掘調査を行い、後期旧石器時代における礫群、縄文早期における集石遺構、土坑等の遺構とともに旧石器時代を中心に多数の遺物（石器）を確認することができました。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

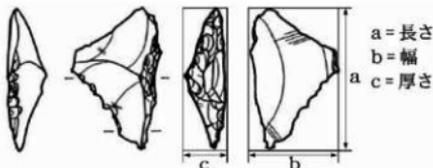
宮崎県埋蔵文化財センター  
所 長 宮 園 淳 一

## 例言

- 1 本書は、東九州自動車道（都農～西都賀）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した上新開遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。  
なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測・写真撮影等の記録は、小山博、都成量、松尾有年が行い、一部について発掘作業員の協力を得た。また、本書で使用した遺物写真は、小山が撮影した。
- 4 調査区の座標設置及びグリッドの設定は、有限会社 服部測量設計に委託した。なお、国土座標は旧国土座標第Ⅱ系に拠る。
- 5 空中写真撮影は、九州航空株式会社に委託した。
- 6 石器実測委託は、株式会社 九州文化財研究所に委託した。
- 7 整理事業は、遺物については埋蔵文化財センターで行い、礫の整理については東亜原整理事業事務所において行った。
- 8 本書で使用した位置図は国土地理院発行の2万5千分の1図をもとに作成し、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供された1000分の1図をもとに作成した。
- 9 本書で使用した方位は主に磁北（M.N.）であり、位置図等の一部は座標北（G.N.）である。また、標高は海拔絶対高である。
- 10 土層断面・石材の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。
- 11 本書の執筆と編集は、小山が担当した。
- 12 石器の実測や図面の作成、本書の執筆にあたって、小山幸子（元宮崎市教育委員会）の協力を得た。
- 13 出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡例

- 1 遺構の略号は次のとおりとする。  
SⅠ 礫群・集石遺構      SC 土坑・陥し穴  
なお、礫群の番号は、第Ⅰ文化層検出の礫群は001から、第Ⅱ文化層検出の礫群は101から、縄文時代早期の集石遺構は201から番号を付けている。
- 2 挿図の縮尺は次のとおりとする。  
遺物実測図…2/3    1/2    2/5    1/4  
遺構実測図…1/20    1/25  
土層断面図…1/50    ※以上を基本とするが、これ以外のものもある。
- 3 石器計測表の計測値は、下記の計測方法に拠った。単位は、cm、gである。
- 4 石器の節理面は一点鎖線で表示した。微細刺離のみられる部分は→でその範囲を示した。「折れ」の部分は、欠損部分に／＼の記号を記した。ガジリは白抜きで表現している。



## 【石器の分類について】

本文中に掲載されている石器は、すべて下記に基づいて分類されている。

### ナイフ形石器

I類：一側縁加工のもの

- a：縦長剥片を素材として使用するもの
- b：横長剥片を素材として使用するもの
- c：不定形剥片を素材として使用するもの（例、幅広の剥片）

II類：二側縁加工のもの

- a：縦長剥片を素材として使用するもの
- b：横長剥片を素材として使用するもの
- c：不定形剥片を素材として使用するもの（例、幅広の剥片）
- d：横剥ぎ（瀬戸内系の可能性のあるもの）
- e：切り出し型

III類：先端加工を施すもの

IV類：先端と基部に加工を施すもの

### 角錐状石器

I類：紡錘形

II類：菱形

III類：著しく小型のもの

### 剥片尖頭器

I類：基部の両側に抉りが施されるもの

II類：基部の片側に抉りが施されるもの

III類：その他

### 台形石器

I類：素材の長軸に対して上辺（刃部）が直交するもの

II類：素材の長軸に対して上辺（刃部）が斜行するもの

### エンド・スクレイパー

I類：素材の下縁のみに刃部を形成するもの

II類：素材の全周に対して1/2の縁辺に刃部加工を施すもの

III類：素材の全周もしくは3/4周程度に刃部を形成するもの

IV類：いわゆる「ラウンド・スクレイパー」と称されるもので、円形を呈するもの

### サイド・スクレイパー

I類：素材の片側の縁辺に刃部加工を施すもの

II類：素材の両側の縁辺に刃部加工を施すもの

### 二次加工剥片

I類：縦長剥片を素材として使用するもの

II類：横長剥片を素材として使用するもの

III類：幅広の剥片を素材として使用するもの

### 使用痕剥片

I類：縦長剥片を素材として使用するもの

II類：横長剥片を素材として使用するもの

III類：幅広の剥片を使用するもの

### 石核

I類：単設打面を中心に剥片剥離作業が行われるもの

II類：打面転移を繰り返しながら剥片剥離作業が行われるもの

III類：石核縁辺を打面として剥片剥離作業を行うもの

### 磨石・敲石・磨石兼敲石

I類：素材の形状が扁平な円形もしくは楕円形をなすもの

II類：素材の形状が棒状をなすもの

## 石鏡

I類：正面観が二等辺三角形を呈するもの

- a：脚部が平基のもの
- b：脚部が凹基のもの

II類：正面観が正三角形を呈するもの

- a：脚部が平基のもの
- b：脚部が凹基のもの

III類：未製品

### 【石材の分類について】

本文中に掲載されている石器の石材は、すべて下記に基づいて分類されている。

## 流紋岩

流紋岩Ⅰ：割れ口の色…灰白色～褐灰色～にぶい黄橙色。

表皮の様子…灰白色の雲状、縞状の模様があることがある。

流紋岩Ⅱ：割れ口の色…灰～暗灰色。

表皮の様子…円礫表面はきわめてなめらかなものが多い。

流紋岩Ⅲ：割れ口の色…黒色。

表皮の様子…円礫表面はきわめてなめらかでガラス質。白っぽくみえる場合もある。

流紋岩Ⅳ：割れ口の色…暗赤褐色～青黒色～紫黒色。

表皮の様子…円礫表面はなめらか。

流紋岩Ⅴ：割れ口の色…オリーブ灰色～暗オリーブ灰色。

表皮の様子…表面はきわめてなめらか。褐色に風化している場合がある。

## ホルンフェルス

緻密なホルンフェルス：頁岩源、葉理シルト岩源、砂岩源

粗いホルンフェルス：粗粒組織ホルンフェルス

## 黒曜石

- |     |   |                   |
|-----|---|-------------------|
| 非透明 | ⎧ | 1：黒色。気泡・球顆を多く含む。  |
|     |   | 2：黒色。気泡・球顆を少なく含む。 |
|     |   | 3：黒色。気泡・球顆を含まない。  |
|     |   | 4：黒色。層状の構造をもつ。    |
| 透明  | ⎧ | 5：黒色。気泡をわずかに含む。   |
|     |   | 6：黒色。層状の構造をもつ。    |
|     |   | 7：茶色。粒顆を含むもの。     |

## チャート

- 1：黒灰色。白色・黒色の縞模様を含む。
- 2：白色
- 3：赤色
- 4：青灰色。黒色の粒顆を含む。
- 5：緑灰色
- 6：黒灰色
- 7：黒色
- 8：白色。縞模様。
- 9：茶色。
- 10：灰色。白色模様。
- 11：灰色。黒色縞模様。
- 12：灰色。縞模様。

# 本文目次

第I章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第II章	遺跡の環境	
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第III章	調査の経過と方針	
第1節	確認調査の概要	3
第2節	発掘調査の方法	3
第3節	整理作業及び報告書作成	6
第IV章	調査の概要	
第1節	調査の概要	9
第2節	基本層序	9
第3節	旧石器時代の遺構と遺物	
1	第I文化層の遺構と遺物	
(1)	遺構	9
(2)	遺物	19
(3)	小結	35
2	第II文化層の遺構と遺物	
(1)	遺構	47
(2)	遺物	47
(3)	小結	61
第4節	縄文時代早期の遺構と遺物	
(1)	遺構	70
(2)	遺物	77
(3)	小結	77
第5節	その他の遺物	
(1)	遺物	86
(2)	小結	87
第V章	まとめ	
1	旧石器時代	94
2	縄文時代早期	95
	まとめ	95

# 挿図目次

第1図	遺跡分布図	4	第18図	接合資料1実測図(1)	25
第2図	遺跡周辺地形図及び調査区	5	第19図	接合資料1実測図(2)	26
第3図	確認調査トレンチ配置図	7	第20図	接合資料1実測図(3)	27
第4図	グリッド配置図	8	第21図	接合資料1実測図(4)	28
第5図	土層断面実測図(1)	10	第22図	接合資料1実測図(5)	29
第6図	土層断面実測図(2)	11	第23図	接合資料2・3実測図	30
第7図	土層断面実測図(3)	12	第24図	接合資料4・5実測図	31
第8図	土層断面実測図(4)	13	第25図	接合資料6実測図	32
第9図	遺構分布図(1)〔A・B区〕	14	第26図	接合資料7実測図	33
第10図	遺構分布図(2)〔C・D区〕	15	第27図	接合資料8・9実測図	34
第11図	IX・X層赤化礫分布図〔A区〕	16	第28図	XI・X層出土遺物実測図(1)	36
第12図	IX・X層礫分布図(1)	17	第29図	X層出土遺物実測図(2)	37
第13図	IX層礫分布図(2)	18	第30図	X層出土遺物実測図(3)	38
第14図	雑群実測図〔第I文化層〕	20	第31図	X層出土遺物実測図(4)	39
第15図	遺物分布図〔第I文化層〕(1)	21	第32図	X層出土遺物実測図(5)	40
第16図	遺物分布図〔第I文化層〕(2)	22	第33図	IX層出土遺物実測図(1)	41
第17図	接合資料分布図(1)	24	第34図	IX層出土遺物実測図(2)	42

第35図	IX層出土遺物実測図(3)	43
第36図	IX層出土遺物実測図(4)	44
第37図	IX層出土遺物実測図(5)	45
第38図	IX層出土遺物実測図(6)	46
第39図	縄群実測図〔第Ⅱ文化層〕(1)	48
第40図	縄群実測図〔第Ⅱ文化層〕(2)	49
第41図	遺物分布図〔第Ⅱ文化層〕(1)	50
第42図	遺物分布図〔第Ⅱ文化層〕(2)	51
第43図	遺物分布図〔第Ⅱ文化層〕(3)	52
第44図	遺物分布図〔第Ⅱ文化層〕(4)	53
第45図	接合資料分布図〔第Ⅱ文化層〕	54
第46図	接合資料10実測図	55
第47図	接合資料11実測図	56
第48図	接合資料12・13実測図	57
第49図	接合資料14・15実測図	58
第50図	接合資料16・17・18・19実測図	59
第51図	接合資料20実測図	60
第52図	V層出土遺物実測図	62
第53図	V層出土遺物実測図(1)	63
第54図	V層出土遺物実測図(2)	64
第55図	VI層出土遺物実測図(1)	65
第56図	VI層出土遺物実測図(2)	66
第57図	VI層出土遺物実測図(3)	67
第58図	VI層出土遺物実測図(4)	68
第59図	VI・V・IV層出土遺物実測図(5)	69
第60図	集石遺構実測図(1)	71
第61図	集石遺構実測図(2)	72
第62図	集石遺構実測図(3)	73
第63図	集石遺構実測図(4)	75
第64図	集石遺構実測図(5)	76
第65図	土坑実測図(1)	78
第66図	土坑実測図(2)	79
第67図	土坑実測図(3)	80
第68図	土坑実測図(4)	81
第69図	土坑実測図(5)	82
第70図	土坑実測図(6)	83
第71図	縄文時代早期出土遺物実測図(1)	84
第72図	縄文時代早期出土遺物実測図(2)	85
第73図	接合資料21実測図	87
第74図	一括遺物実測図(1)	88
第75図	一括遺物実測図(2)	89
第76図	一括遺物実測図(3)	90
第77図	一括遺物実測図(4)	91
第78図	一括遺物実測図(5)	92
第79図	一括遺物実測図(6)	93

## 表目次

第1表	第Ⅰ文化層石材別石器組成表	35
第2表	第Ⅱ文化層石材別石器組成表	62
第3表	一括石材別石器組成表	87
第4表	接合資料計測表①	96
第5表	接合資料計測表②	97
第6表	石器計測表①	98
第7表	石器計測表②	99
第8表	石器計測表③	100
第9表	縄文土器観察表	100
第10表	石器計測表④	101

## 図版目次

図版1	遺跡遺景(南より) 調査区全景(西より)	107
図版2	A区土層断面(東壁)(Ⅰ～Ⅵ層) A区土層断面(東西ベルト)(Ⅶ～Ⅹ層) A区東西方向トレンチ遺物出土状況 B区SI001検出状況	108
図版3	A区散礫検出状況(北から) A区散礫検出状況(西から)	109
図版4	B区SI002検出状況 B区SI003検出状況 A区SI101検出状況 C区SI103検出状況	110
図版5	A区SI201検出状況 A区SI202検出状況 A区SI201配石検出状況 A区SI202配石検出状況	111
図版6	B区SI204・205検出状況 C区SC12完掘状況 C区SC12半載状況(横から) C区SC12半載状況(上から)	112
図版7	A区SC1完掘状況、A区SC7完掘状況 A区SC9完掘状況、A区SC10完掘状況	113
図版8	A区作業状況1、A区作業状況2 A区完掘状況、B区完掘状況 C区完掘状況、D区完掘状況	114
図版9	接合資料1①、接合資料1②、接合資料1③ 接合資料1-(1)、接合資料1-(2) 接合資料2・6・7	115
図版10	接合資料2・7、接合資料8・10 接合資料10、接合資料15・16① 接合資料15・16②、Ⅺ・Ⅹ層出土遺物(1)	116
図版11	X層出土遺物(2)、X層出土遺物(3) Ⅸ層出土遺物(1)、Ⅸ層出土遺物(2) Ⅸ・Ⅶ層出土遺物、Ⅶ層出土遺物	117
図版12	Ⅵ層出土遺物(1)、Ⅵ層出土遺物(2) Ⅵ・Ⅴ・Ⅳ層出土遺物、一括遺物(1) 一括遺物(2)、一括遺物(3)	118

# 第I章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道(都農～西都間)は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となった。さらに、平成9年12月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の2月から事業に着手している。その間、宮崎県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査は平成11年度から日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターが行っている。

上新開遺跡は児湯郡新富町大字新田字上新開の工事区内にある。住宅地等の転居の問題のために、一部確認調査ができなかったが、本調査に先立ち平成14年8月26日～9月13日に確認調査を実施した。ほとんどが耕作地を確保するために削平されており、原地形が改変されていた。しかし、南端の茶畑は削平の影響が少なく一部にアカホヤ火山灰層が残存していた。また、北端の畑は客土が厚く堆積していたが、それらを取り除くと小林軽石を含む褐色土が一部残存していた。確認トレンチを入れたところ、集石遺構の礫や剥片などの遺物が出たため、平成14年11月19日から南端の茶畑と北側の畑地を発掘調査することになった。本調査中に住居の移転が終了したために、同年9月に確認調査を実施した。ほとんどが削平されていたが、小林軽石を含む褐色土が一部残存していた。確認トレンチを入れたところ、土坑と見られる遺構や礫群の礫、剥片などの遺物が出たので、平成15年の4月から、その箇所を加えて本調査することになった。

## 第2節 調査の組織

上新開遺跡の調査組織を次に示す。

調査主体 宮崎県教育委員会  
宮崎県埋蔵文化財センター

所長

米良 弘康(平成14・15年度)

宮園 淳一(平成16・17年度)

副所長兼総務課長

大藪 和博(平成14～16年度)

副所長兼調査第二課長

岩永 哲夫(平成14～17年度)

総務課長

宮越 尊(平成17年度)

総務係長

野邊 文博(平成14年度)

主幹兼総務係長

石川 恵史(平成15～17年度)

調査第一課長

児玉 章則(平成14・15年度)

高山 富雄(平成16・17年度)

調査第一係長

谷口 武範(平成14～16年度)

主幹兼調査第一係長

長津 宗重(平成17年度)

調査第二係長

長津 宗重(平成14・15年度)

主幹兼調査第二係長

長津 宗重(平成16年度)

主幹兼調査第二係長

菅付 和樹(平成17年度)

調査担当

主任主事 小山 博(平成14・15年度)

主査 都成 量(平成15年度)

調査員 松尾 有年(平成14・15年度)

調査協力

一ツ瀬土地改良区

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

上新開遺跡は、新富町大字新田字上新開に所在する。新富町は、宮崎平野のやや中央寄りの沿岸部にあり、洪積台地が大部分を占める。北部には茶臼原台地、三財原台地、新田原台地と丘陵が広がり、南部には一ツ瀬川の低地が広がる。

本遺跡は、三財原台地の南端部に位置し、鬼付女川などの小河川の浸食によって形成された舌状に延びる台地に位置する。台地の南端は鬼付女川の流れる低地となる。

本遺跡を含む周辺一帯は、耕作地を確保するために丘陵部を大幅に削平し、谷や斜面に客土を埋めて耕作地を広げていることから、旧地形が大幅に改変されている。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡では、旧石器時代の遺構・遺物と縄文時代早期の遺構・遺物が検出・確認された。そこで、遺跡周辺の同時期の遺跡について概観する。

#### 1 旧石器時代

本遺跡の周辺では、新田原台地の北西端に位置する畦原地区で大野寅夫氏が「畦原型細石核」を表採している。この細石核は南九州の一部に限定して分布するという、地域性のきわめて強いものである。残念ながら本遺跡では確認することができなかった。

また、新田原台地上の溜水遺跡、銀代ヶ迫遺跡などでは、ナイフ形石器や角錐状石器・細石刃・スクレイパー等が出土している。

東九州自動車道建設に伴う発掘調査では、本遺跡周辺の遺跡でも旧石器時代の遺構や遺物が確認されている。西畦原第1遺跡では、礫群3基を検出し、細石刃・ナイフ形石器等が出土している。また、西畦原第2遺跡では、遺構として礫群9基、石器ブロックが2箇所確認され、遺物としてナイフ形石器・角錐状石器等が出土している。東畦原第3遺跡では、

礫群12基や石器ブロック23箇所、土坑1基を検出し、ナイフ形石器・角錐状石器・台形石器等が出土している。勘大寺遺跡（一次調査）では、礫群15基や石器ブロック5箇所、土坑4基を検出し、角錐状石器・ナイフ形石器・スクレイパー等が出土している。

#### 2 縄文時代早期

新富町内におけるこの時期の代表的な遺跡は、新田原段丘面の西南端の春日地区に所在する瀬戸口遺跡である。標高約70mの台地縁辺部にあり、集石遺構23基を検出し、縄文時代草創期の陸起線土器、早期の押型文・貝殻条痕土器、石鎌・石斧・石錘・磨石等の石器などが出土している。

また、新田原段丘面最南端に位置する八幡上遺跡や七又木遺跡、銀代ヶ迫遺跡でも縄文早期の集石遺構が検出され、同時期の遺物が出土している。

東九州自動車道関連の調査でも、同様の成果が確認されている。西畦原第2遺跡（一次・二次調査）では、集石遺構や土坑が検出され、同時期の遺物を出土している。また、勘大寺遺跡では、陥し穴状遺構と集石遺構が検出され、同時期の遺物を出土している。東畦原第3遺跡では集石遺構が検出され、石鎌・石核・剥片等の石器が出土した。東畦原第2遺跡では、土坑を検出し、平格式土器や石鎌が出土している。

#### 【参考文献】

- 『新富町史』通史編、新富町、1992年
- 『新富町の埋蔵文化財 遺跡詳細分布調査報告書』新富町、1982年
- 『勘大寺遺跡 一次調査』、宮崎県埋蔵文化財センター、2005年
- 『西畦原第2遺跡 二次・三次調査』宮崎県埋蔵文化財センター、2005年

## 第三章 調査の経過と方針

### 第1節 確認調査の概要

確認調査は、調査対象区域内の住居の移転が一部残っていたので、その住居と牛舎を除いた部分を一次確認調査として平成14年8月26日～9月13日に実施した。また、本調査中に住居と牛舎の移転が終了したので、一次確認調査の対象外であった住居と牛舎の移転した箇所を二次確認調査として平成15年2月4日～2月18日に実施した。

#### 1 一次確認調査の概要

調査対象地は、山の斜面を大幅に削平して、耕作地を確保しており、原地形が大幅に改変されていることが窺える。特に、宅地跡と北側の畑地は大幅な削平を受けていたので、重機によるトレンチ掘りを実施した。地形の改変をあまり受けていないとみられる南側の茶畑は、作業員の手掘りによるトレンチ掘りを実施した。宅地跡は、宅地の基礎部分を重機で取り除き掘り下げたが、表土下から褐色土が確認され、その直下はアワオコシ、イワオコシ、さらに砂礫層が堆積していた。北側の畑地は、山を削りその削った土を山の斜面に埋めて耕作地を広げているために、一部はアワオコシ・イワオコシまで削平され、一部では客土が厚く堆積していた。重機を使用して客土を除去したところ、一部アカホヤ火山灰層と小林軽石を含む褐色土が残っていた。作業員の手掘りでトレンチを入れたところ、石器などの遺物が出土した。南端の茶畑では、表土下から一部アカホヤ火山灰層が確認され、小林軽石を含む褐色土も確認された。トレンチを入れたところ、集石遺構に関係する焼けた礫や剥片などの石器が出土した。

この結果を受けて、南端の茶畑と北側の畑地で削平を受けていない箇所を本調査することになった。

#### 2 二次確認調査の概要

本調査中に、住居の移転が終了したために平成15年2月4日～2月18日に確認調査を実施した。ここでは、住居と牛舎、畑として使用されており、原地

形は大幅に削平されていた。

宅地跡は大幅に削平されており、表土下は粘質土であった。牛舎跡は重機によりコンクリートの基礎や床面の取り外しを行った。ほとんどが攪乱されていたが、小林軽石を含む褐色土が一部残っており、土坑を1基検出した。北側の畑地も山の斜面を削平して耕作地を広げていた。客土が厚く堆積していたが、小林軽石を含む褐色土が残っており、大型の礫や剥片が出土し、さらに礫群を1基検出した。以上の結果により、牛舎の跡地と北側の畑地を本調査することになった。

### 第2節 発掘調査の方法

#### 1 調査の方法と調査区の設定・調査の手順

一次確認調査の結果をうけ、南端の茶畑をA区、北側の畑地をB区とし、平成14年11月19日から調査を実施した。また、二次確認調査の結果を受けて、平成15年4月1日からの調査では、牛舎の跡地とその北側の畑地をそれぞれC区、D区として、合計4箇所の調査を実施した。

調査は、遺物の包含層である小林軽石を含む褐色土と、AT層下の暗褐色ローム層の掘り下げを順次実施した。

#### 2 調査報告会

平成16年3月6日に、東睦原整理作業事務所、永牟田第1遺跡・尾小原遺跡（二次）とともに合同調査報告会を実施した。遺跡の報告や出土遺物、新富町内の遺跡で検出された陥し穴などについての説明を行った。

#### 3 日誌抄

○平成14年11月

19日より重機による表土剥ぎを実施する。調査事務所の設置と並行して実施する。25日より作業員を投入し精査を行う。

○平成14年12月



- |           |           |                |                |
|-----------|-----------|----------------|----------------|
| 1 音明寺第1遺跡 | 2 音明寺第2遺跡 | 3 東畦原第1遺跡      | 4 東畦原第2遺跡      |
| 5 東畦原第3遺跡 | 6 西畦原第1遺跡 | 7 西畦原第2遺跡 (三次) | 8 西畦原第2遺跡 (二次) |
| 9 上新開遺跡   | 10 勘大寺遺跡  | 11 瀬戸口遺跡       | 12 八幡上遺跡       |
| 13 銀代ヶ迫遺跡 | 14 七又木遺跡  | 15 溜水遺跡        |                |

第1図 遺跡分布図 (S = 1/50,000)



第2図 遺跡周辺地形図及び調査区 (S = 1/4,000)

9日よりA区の調査区の周囲に堆積状況を確認するためのトレンチを入れる。10日A区の南端で客土の堆積が確認される。客土中には剥片や黒曜石、チャート類などの遺物が含まれており、客上の掘り下げを実施する。

○平成15年1月

7日A区Ⅵ層で精査中、C19・D20グリッドで焼土伴う土坑を検出する。9日A区の西側で集石遺構を検出する。10日A区の集石遺構は2基で、焼土を伴う土坑は4基であることを確認する。16日A区で礫群を1基検出する。20日から集石遺構の実測を行う。

○平成15年2月

4日から二次確認調査を開始する。18日からB区の精査を開始する。24日A区で検出した礫群の実測を開始する。

○平成15年3月

17日からB区Ⅳ・Ⅴ層の掘り下げを開始する。

○平成15年4月

7日からA・B区のⅥ層掘り下げを開始する。18日B区の斜面から焼けた礫が検出される。28日礫を検出したB区の掘り下げを実施する。集石遺構を3基検出する。

○平成15年5月

7日B区で検出した集石遺構の実測を開始する。23日B区のⅧ層の掘り下げを開始する。

○平成15年6月

3日A区Ⅷ層の掘り下げを開始する。5日B区のⅨ層から礫群を検出する。25日B区礫群の実測を開始する。

○平成15年7月

11日B区の調査終了。C区の調査開始。22日・23日教職経験10年経過研修で13名の発掘体験を行う。23日C区の陥し穴を実測する。

○平成15年8月

5日宮崎南高校男子生徒2名職場体験学習を受け

入れる。18日D区重機による表土剥ぎを開始する。25日B区の埋め戻しを実施する。26日D区検出の礫群の実測を開始する。

○平成15年9月

8日C・D区の調査終了。9日よりA区の礫群及び散礫の実測開始。26日A区の散礫の実測終了。

○平成15年10月

1日プレハブ等を撤収する。6日から10日まで埋め戻しを行う。17日鉄板を撤収し調査を終了する。

の整理を実施する。翌年度の4月8日から水洗・注記・接合・計測の整理作業を開始し、同年11月25日に作業を終了する。

平成16年11月25日から平成17年3月18日まで株式会社九州文化財研究所に石器実測を委託する。

平成17年9月より報告書作成を開始する。

## 第3節 整理作業及び報告書作成

### 1 整理の方針・方法

本遺跡で発掘された資料の整理作業は、平成15年1月より新富町大字新田字下迫口所在の東睦原整理作業事務所で礫の整理を実施し、遺物等については本センターで整理作業を開始した。

東睦原整理作業事務所では、礫の洗浄、注記、計測を行い、その後接合作業を行った。計測は、礫の計測値と石材・赤化の有無などの記録をとった。接合作業は、はじめに集石遺構の接合を行い、次に礫群内、散礫内での接合を行った。

本センターでの整理作業も同様に、水洗、注記、計測を行い、石材の分類、接合作業を実施した。

遺物の整理作業終了後に、石器実測委託を平成16年11月に行った。

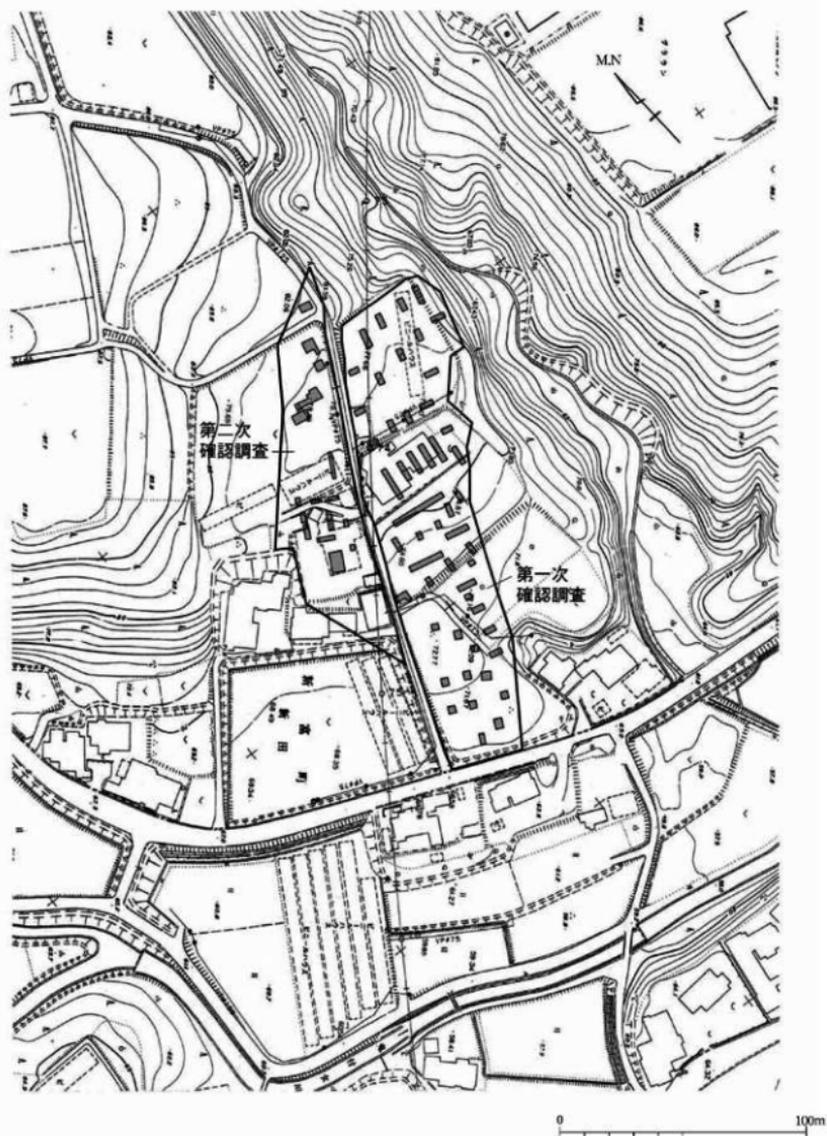
### 2 報告書作成の方針・方法

報告書作成について、遺物の整理作業の進捗に合わせて礫や遺物のデータの整理を順次行った。平成17年9月より遺構・遺物の実測図やトレース図等の作成と点検、報告書レイアウトと文章作成等を随時行った。

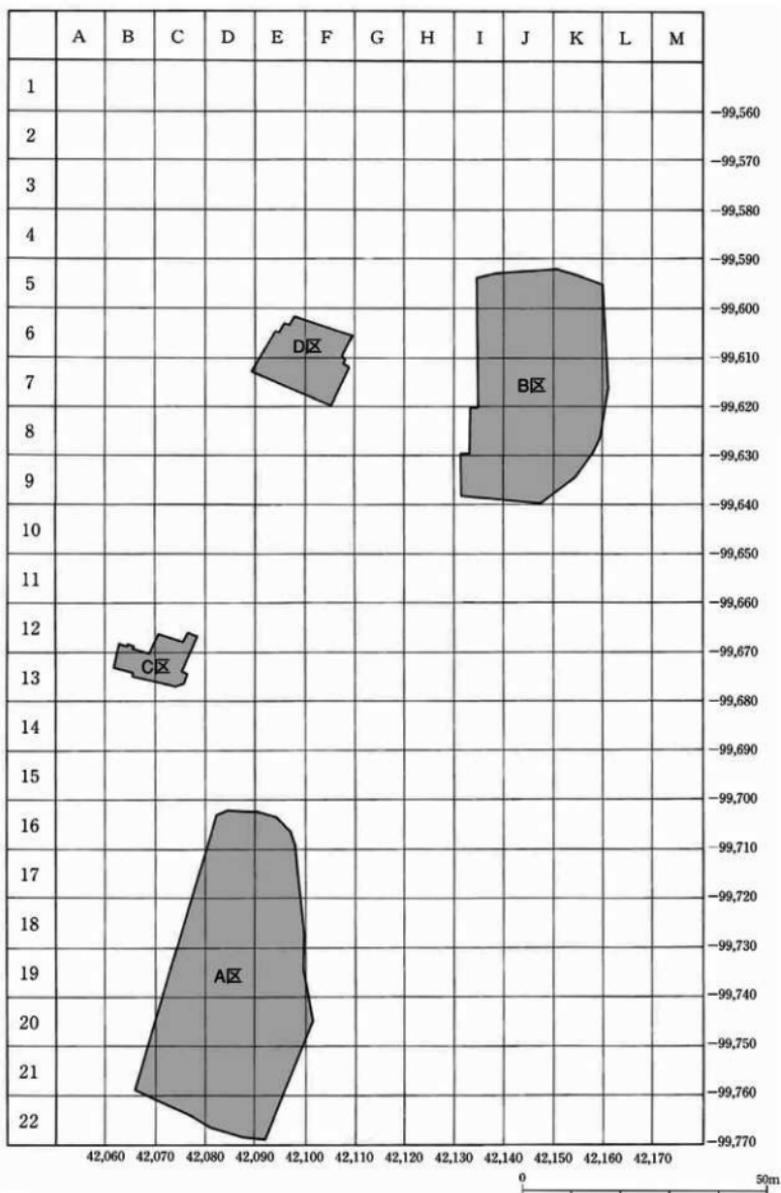
### 3 整理作業・報告書作成作業工程の実際

東睦原整理作業事務所が平成16年1月6日より礫の整理を開始する。礫の水洗・注記・接合・計測・データ入力の実施する。翌年度の同年8月25日に作業が終了する。

本館での作業は、平成16年2月2日から出土遺物



第3図 確認調査トレンチ配置図 (S = 1/2,000)



第4図 グリッド配置図 (S = 1 / 1,000)

## 第IV章 調査の概要

### 第1節 調査の概要

本遺跡の調査では、旧石器時代とK-Ah降灰以前の縄文時代早期の遺構と遺物が出土した。

旧石器時代については、IX層(MB 2・3)～X層(ML 3)の第I文化層から散礫と礫群3基が検出された。遺物としては、磨石・敲石・石核・ナイフ形石器・スクレイパー・二次加工剥片・使用痕剥片などが出土している。

VI層(Kr-Kbを含む褐色土)中位の旧石器時代第II文化層では、礫群を3基検出した。遺物としては、ナイフ形石器、角錐状石器、スクレイパーなどが出土している。

縄文時代早期においては、集石遺構が5基検出され、遺物は敲石・磨石・石皿などが出土している。

その他、時期不明の焼土を伴う土坑を検出し、客土中から石器や土器などの遺物が出土している。

### 第2節 基本層序

本遺跡で確認された層序は、概ね下記の基本層序に集約される。削平によりIII層(K-Ah)とその上位の層はなくなっており、ほとんどがVI層(Kr-Kbを含む褐色土)中位から残存していた。

基本層序は以下に示す通りである。

第I層：表土(耕作土)

第II層：黒色土

第III層：鬼界アカホヤ(K-Ah)

第IV層：黒褐色ローム(MB 0)

第V層：暗褐色ローム(ML 1)

第VI層：褐色ローム(Kr-Kb)

小林軽石を含む

第VII層：褐色ローム(ML 2)

第VIII層：始良Tn(AT)

第IX層：暗褐色ローム(MB 2・3)

第X層：褐色ローム(ML 3)

第XI層：赤褐色ローム

第XII層：アワオコシ(Kr-Aw)

第XIII層：明褐色ローム(ML 4)

第XIV層：イワオコシ(Kr-Iw)

第XV層：明黄褐色ローム(ML 5)

第XVI層：青灰色粘土層

### 第3節 旧石器時代の遺構と遺物

旧石器時代の遺物は主にIX層とVI層から出土している。A区は舌状に伸びる丘陵地であり、斜面の部分では層が安定していない。また、茶畑として利用されていたために、茶の根による影響を受けている。礫の検出層や遺物の垂直分布・属性を検討したところ、大きく2つの文化層に分かれると判断した。従って、第I文化層と第II文化層に分けて報告することとする。なお、遺物の説明は器種ごとに行い、実測図の掲載は出土層ごとに掲載している。

#### 1 第I文化層の遺構と遺物

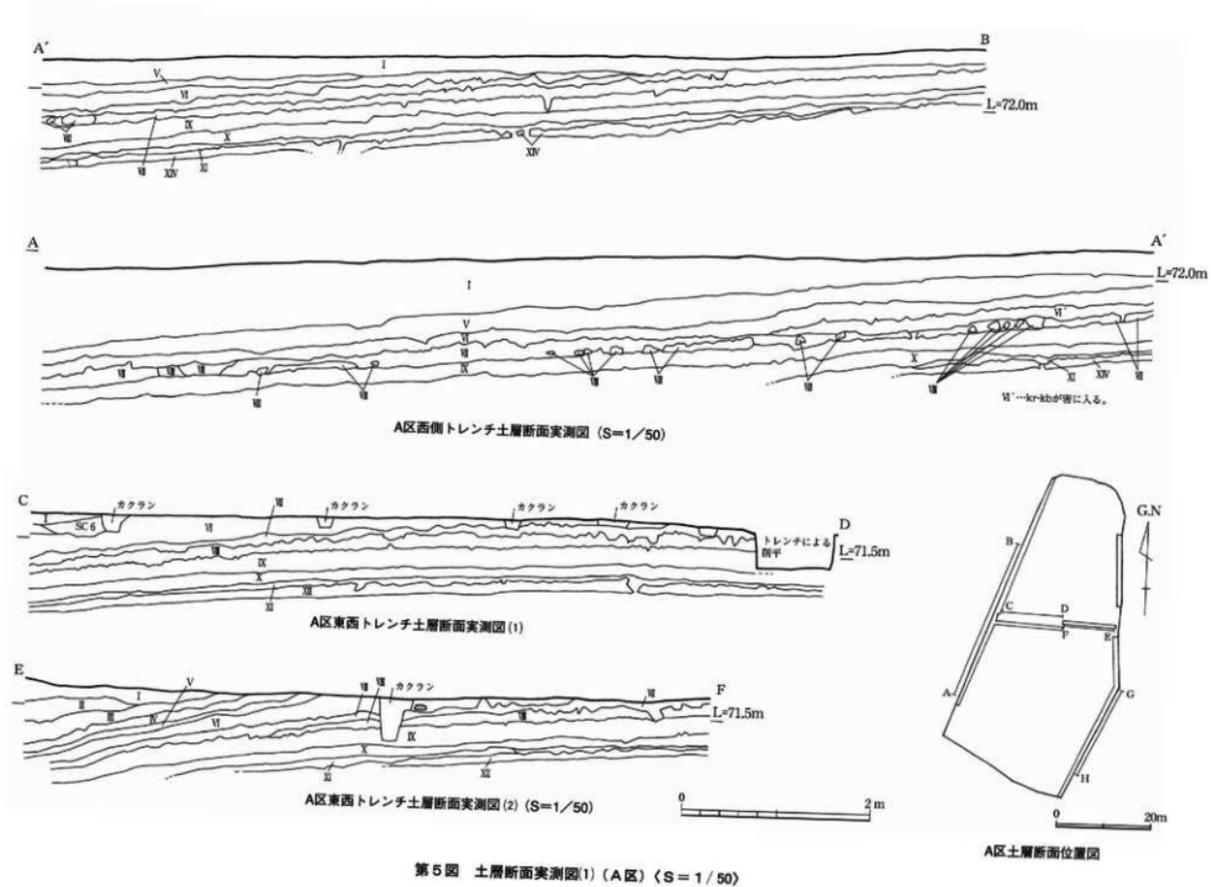
第I文化層は、IX層とX層からなる。石器は主にIX層から出土している。A区では礫がIX層中位からX層にかけて検出された。第11図は、赤化した礫と石器の分布図である。赤化した礫の集中箇所と石器の集中している箇所がほぼ同じである。礫及び石器の垂直分布を検討した結果、同じ文化層と認定している。また、B区でも礫群を検出している。

(1) 遺構(第9図、第10図、第15図)

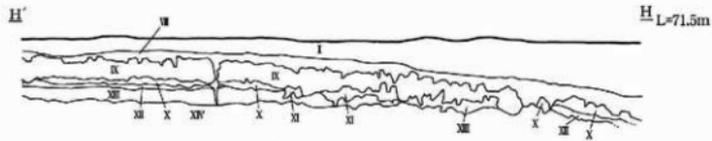
遺構としては、A区で石器ブロックを2箇所、散礫、B区で礫群を3基検出した。

#### 【散礫】(第11図～第13図)

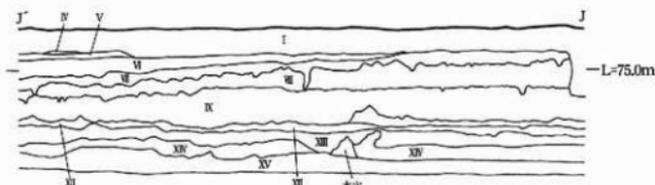
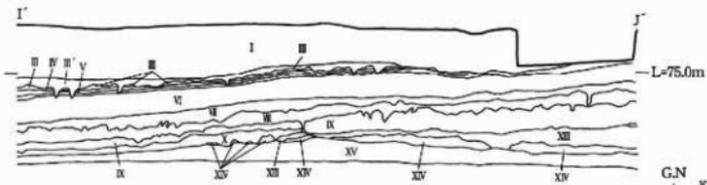
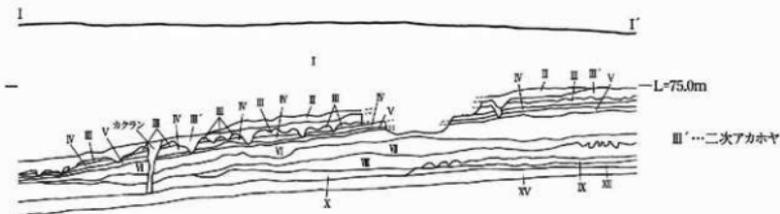
A区では、IX層の掘り下げ中に、IX層中位から礫を検出した。礫はまとまりがなく、まばらな状況である。さらに掘り下げるとIX層の下位からX層の上面にかけて礫を検出した。礫は、赤化しているものと赤化していないものが確認された。礫はまとまりがなくまばらであり、調査区全面に広がった。礫は集中している箇所がなく、礫群としての認定が困難



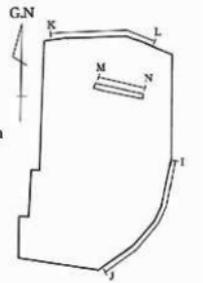
第5図 土層断面実測図(1) (A区) (S=1/50)



A区東側土層断面実測図



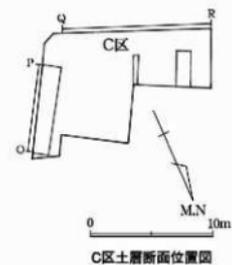
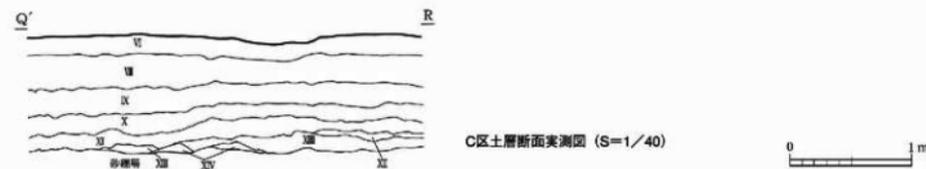
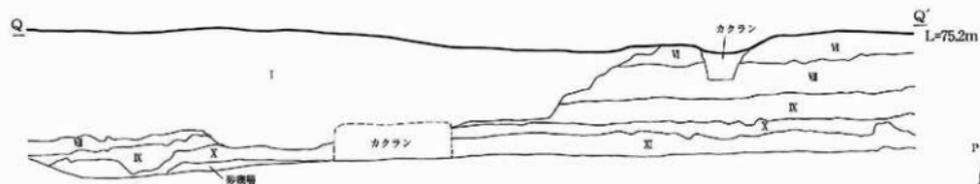
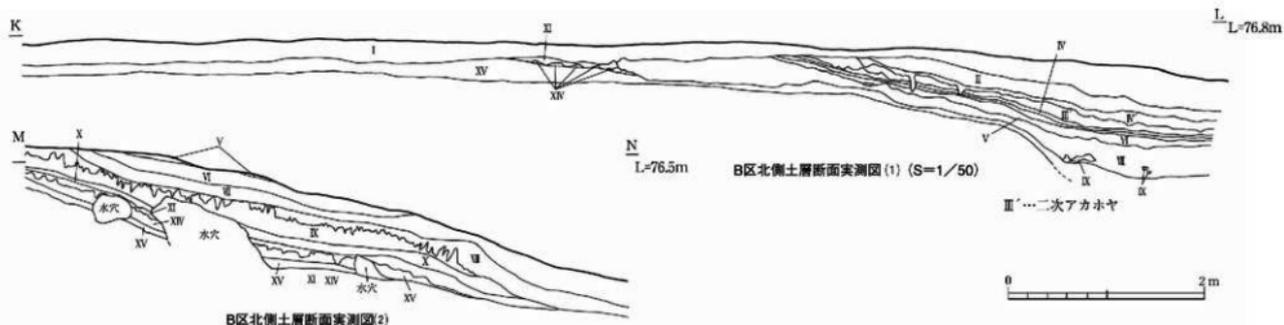
B区東側土層断面実測図



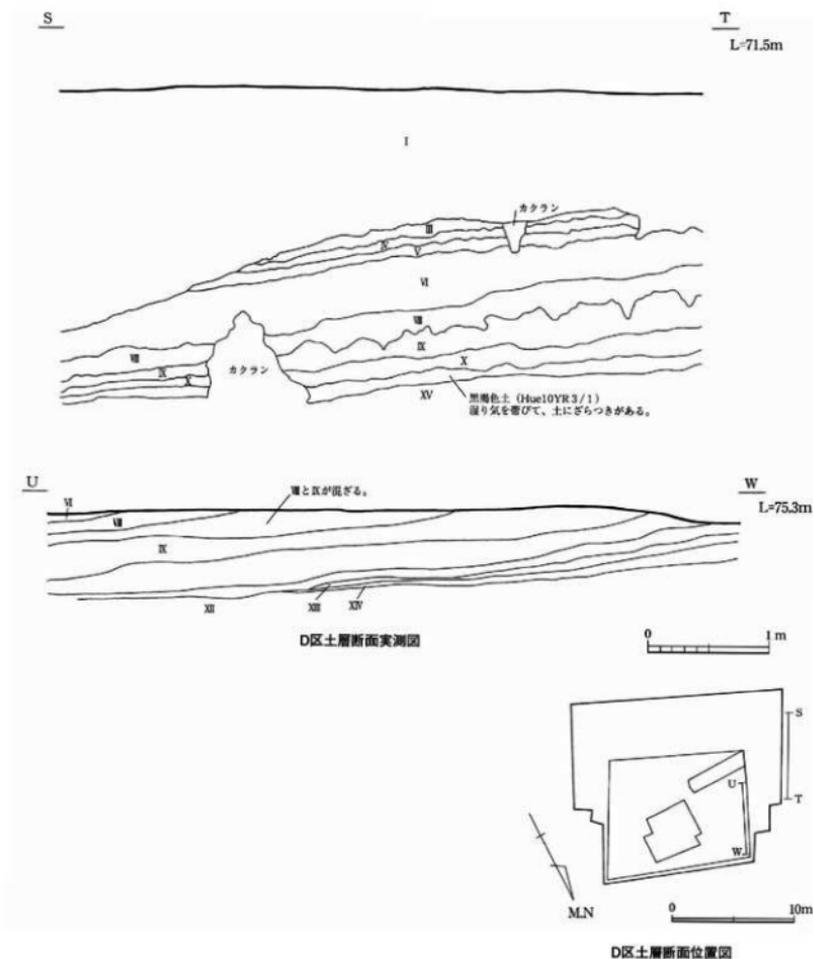
B区土層断面位置図



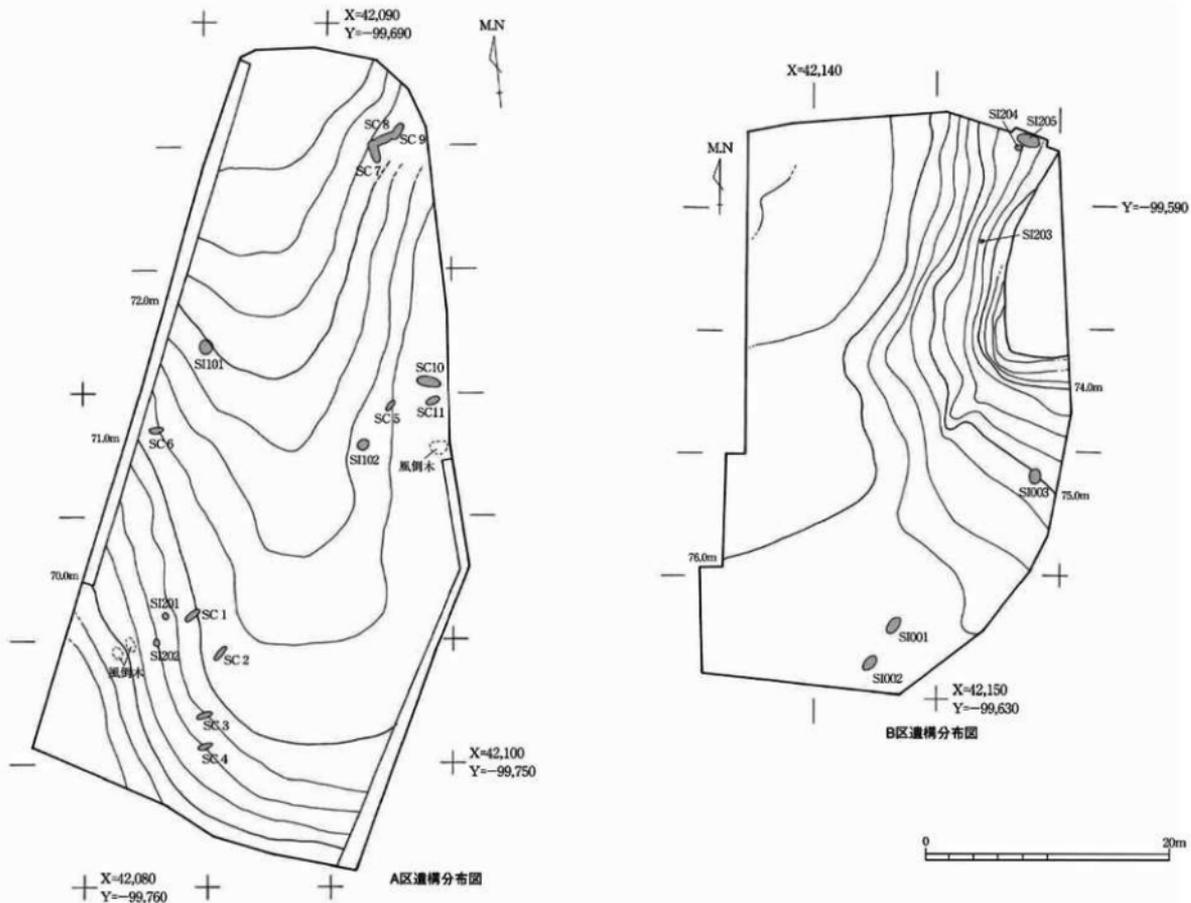
第6図 土層断面実測図(2) (A・B区) (S=1/50)



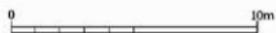
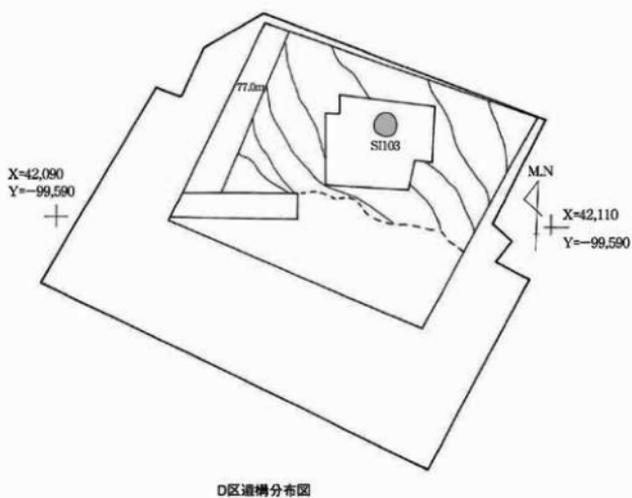
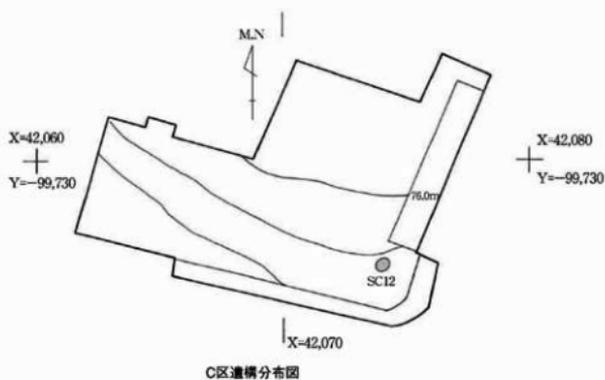
第7図 土層断面実測図(3) (B・C区) (S=1/50, S=1/40)



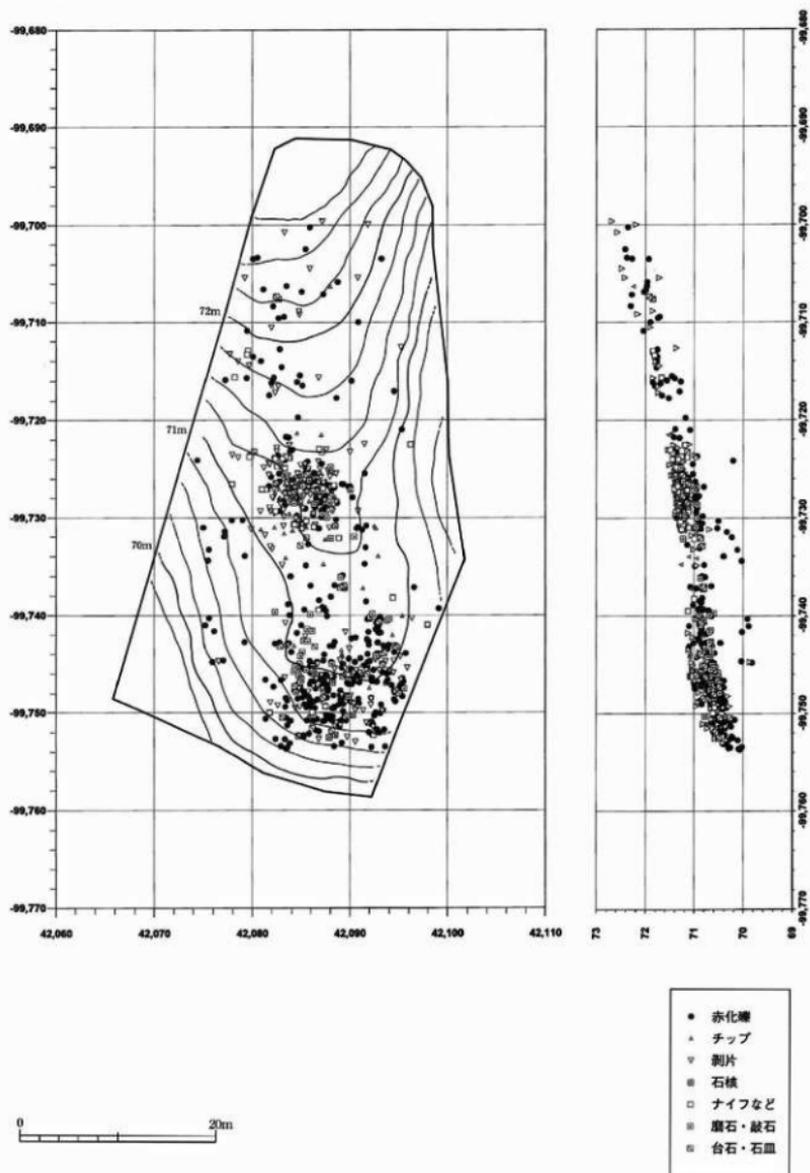
第8図 土層断面実測図(4) (D区) (S=1/40)



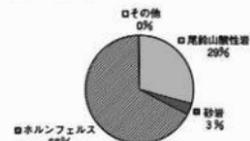
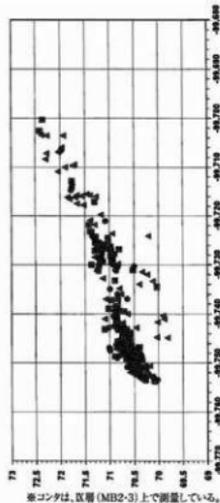
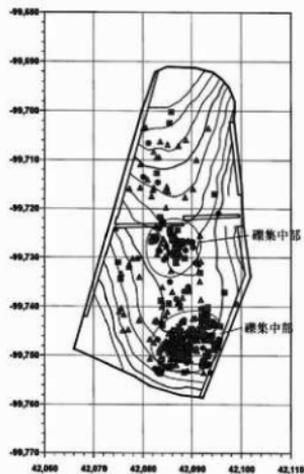
第9图 遺構分布図(1) (A・B区) (S=1/400)



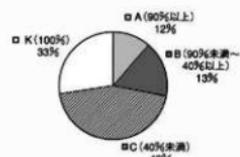
第10図 遺構分布図(2) (C・D区) (S=1/200)



第11図 IX・X層赤化層分布図 (A区) (S = 1 / 500)



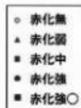
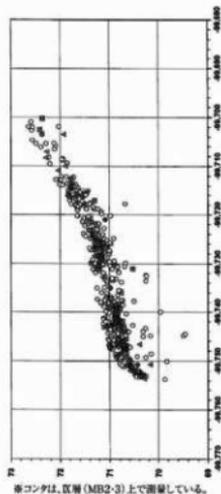
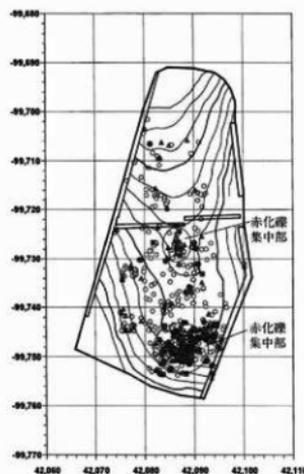
(1) 石材分類グラフ (個体数)



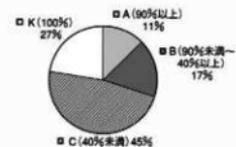
(2) 赤化度グラフ

Ⅳ・Ⅴ層出土赤化度分析図

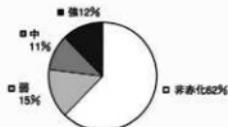
Ⅹ・Ⅹ層赤化度分布図 (A区)



(1) 石材分類グラフ (個体数)



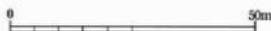
(2) 完形率グラフ



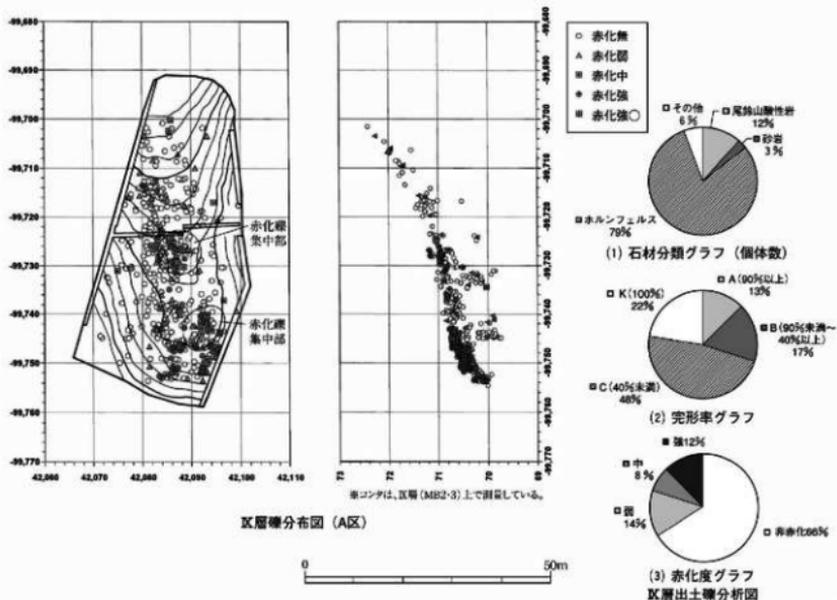
(3) 赤化度グラフ

Ⅹ層出土赤化度分析図

Ⅹ層分布図 (A区)



第12図 Ⅹ・Ⅹ層分布図(1) (A区) (S=1/1,000)



第13図 Ⅸ層礫分布図(2) (A区) (S = 1/1,000)

であったため、礫の出土位置を記録した。礫の総数は2,006個で総重量は351.9kgになる。礫は焼けている礫と焼けていない礫があり、小破片の礫もあるため10g未満の礫を取り除き、赤化の有無で分類した。さらに層ごとに赤化の度合いによって分類したものが第12図と第13図である。Ⅹ層の礫の石材は、ホルンフェルスが9割で、完形率が40%未満が4割と完形が3割を占める。赤化していない礫が6割である。Ⅸ層の礫の石材は、ホルンフェルスが8割で、完形率は40%未満が5割を占め、赤化していない礫も7割を占める。礫の分布をみると、焼けた礫の集中している箇所が2箇所あることが確認された。また、調査中に同じグリッドで炭化物の広がり確認されたことから、火の影響を受けたものとみられる。

#### 【礫群】 (第14図)

礫群は、一般的に主に拳大 (500g前後) 以下の

焼け礫によって構成される礫のまとまりである。

B区では、平坦部と緩やかな斜面上で、Ⅸ層から礫群を3基検出した。確認した礫群は、礫が密集したり集中する部分があり、その周辺に礫が分散している集中型である。

#### S 1001 (第14図)

B区のJ9グリッドで確認された。Ⅸ層 (MB2・3) の掘り下げ中に検出した。赤化している礫を中心に、おおまかに2つのまとまりがみられ、2つの礫群として分けた。

礫群には、剥片と石皿、台石の石器を含んでいる。礫の総数は13個で、石器を除いた礫の総数は8個である。総重量は21.16kgである。礫の石材は、尾鈴山酸性岩と砂岩でそれぞれ4割を占める。完形率も90%以上と完形のもので6割を占める。赤化は弱いものが6割を占める。石皿や台石も赤化しており、

この場所で火を使用しているとみられる。なお、剥片は接合資料7の2点の剥片である。

#### S 1002 (第14図)

B区のJ 9グリッドで確認された。SI001に隣接する。赤化した尾鈴山酸性岩の台石を中心に、礫がまばらに広がっている。剥片と磨石、台石の石器を含んでおり、接合資料7の剥片が1点含まれている。礫の総数は10個で、石器を除いた礫は5個である。総重量は、4.695kgである。石材は8割が尾鈴山酸性岩で、残りの2割は砂岩である。完形率は90%以上、100%完形で8割を占める。すべて赤化している。

#### S 1003 (第14図)

B区のK 8グリッドで確認された。礫の総数は17個であり、石皿や敲石などの石器を除いた総数は13個、総重量は25.73kgである。石材は、尾鈴山酸性岩が6割を占め、完形率は90%以上と100%完形のもの7割を占める。礫は8割が赤化している。

#### 【石器出土状況】(第15図～第16図)

A区では、第I文化層のX層・IX層から石器が出土している。層ごとに石器の出土状況を掲載しているが、2箇所の石器集中箇所が確認された。

#### 第1ブロック (第15図)

調査区のはほぼ中央に位置する。石器組成はナイフ形石器・スクレイパー・細石刃・二次加工剥片・使用痕剥片・石核・剥片・チップである。同じ位置に赤化した礫が集中しており、火を使用した箇所とみられる。さらに石核と剥片が接合している状況である。石器組成において石器製作に関連する石器がみられることから、石器製作の場としての機能が作用していた可能性がある。

#### 第2ブロック (第15図)

調査区の東南部に位置し、舌状に伸びる丘陵部の縁辺にあたる。石器組成はナイフ形石器・スクレイパー・二次加工剥片・使用痕剥片・石核・剥片・チッ

プ・磨石・敲石・台石・石皿で、磨石・敲石・台石・石皿の割合が多い。ホルンフェルスの石核と剥片が接合している状況である。第1ブロックと同じように赤化した礫が集中しており、火を使用した箇所とみられる。石器組成において石器製作に関連する石器がみられることから、石器製作の場としての機能が作用していた可能性がある。

#### (2) 遺物

#### 【接合資料】(第17図)

A区における接合資料の分布をみると、石器のブロックと同じように調査区の中心部と東南部の2箇所に集中している。

#### 接合資料1 (第18図～第19図)

A区のIX層とVI層から出土している。調査区の東南部に分布する。地形的な要因と後世の削平などで層が乱れているとみられることから第1文化層のものだと判断した。

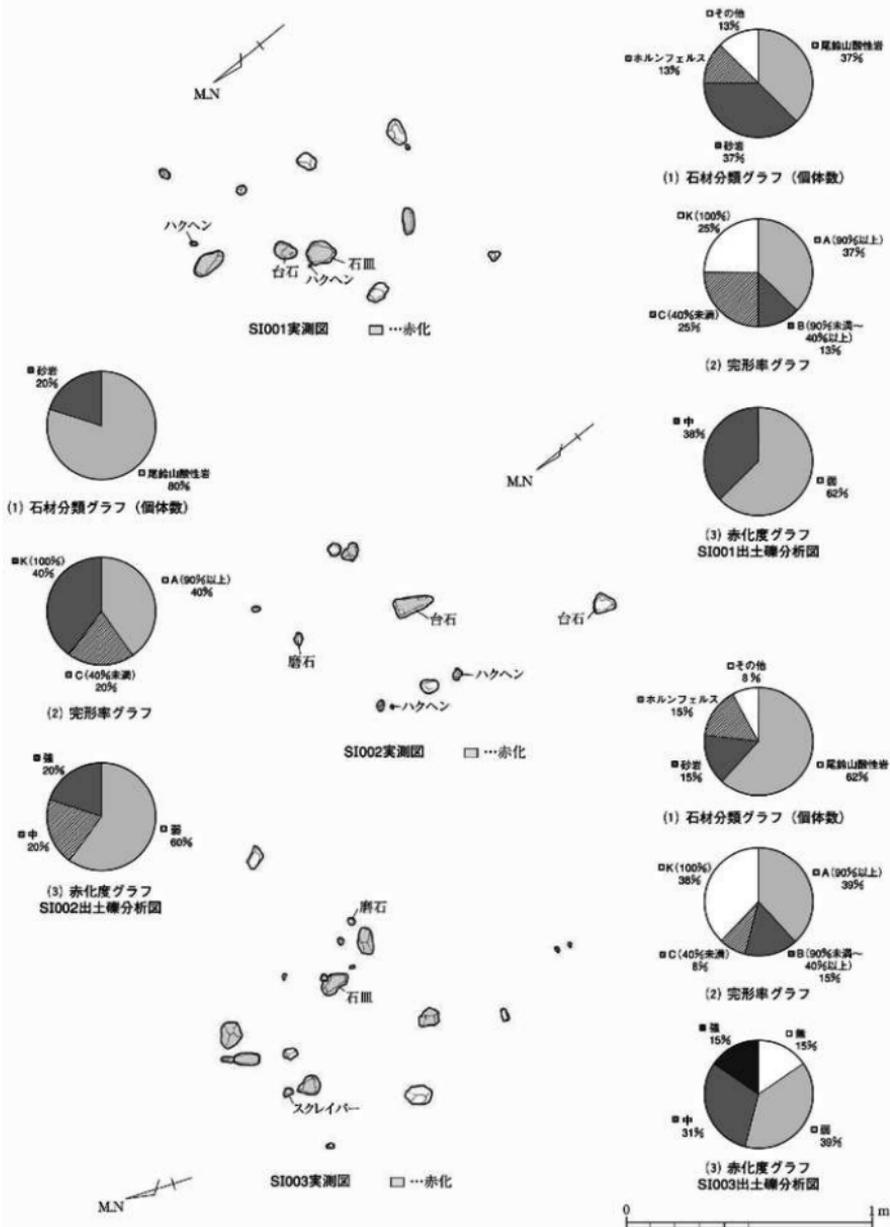
石核2点と剥片17点の計19点が接合している。石材は砂岩源のホルンフェルスである。大型の原石を大きく2分割し、それぞれを石核として剥片剥離が行われている。

#### 接合資料1-①(第20図～第21図)

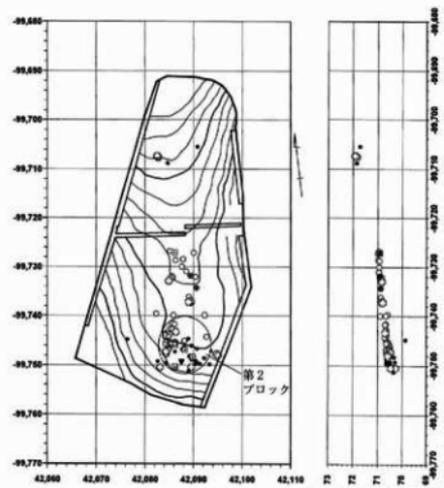
石核1点と剥片7点の計8点が接合している。①は何らかのアクシデントによって、節理に沿って除去されている。②、③はもともと1個体の剥片であるが、やはりアクシデントによって分割されている。②+③の剥片剥離の後に、④→⑧→⑦という順序で剥離作業が行われている。⑥は⑤を打面転移することで剥離されている。

#### 接合資料1-②(第21図～第22図)

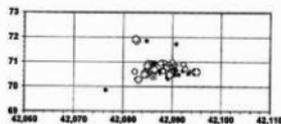
石核1点と剥片10点の計11点が接合している。④の石核を中心に6個体の剥片が剥離されている。打点を少しずつ転移させながら⑩→⑨→⑬+⑭→⑮→⑰の順で剥離作業が行われている。⑩の剥片は別の部分を打面として剥離作業が行われている。一方で⑪→⑫→⑬の順で剥片剥離が行われている。



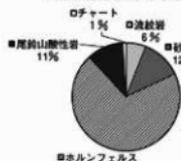
第14図 様群実測図 [第I文化層・B区] (S = 1/200)



※コンタは、直巻(MB2-3)上で測定している。

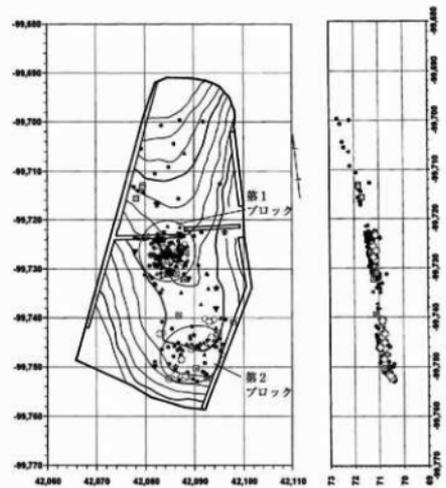


X層遺物分析図 (A区)

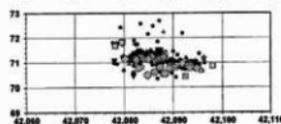


石材分類グラフ

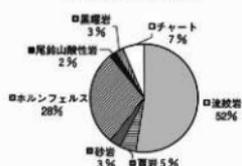
- 剥片
- ▲ チップ
- 石核
- ▼ 二次加工剥片
- 磨石・敲石
- 台石・石皿
- 礫石
- 礫器



※コンタは、K層(MB2-3)上で測定している。



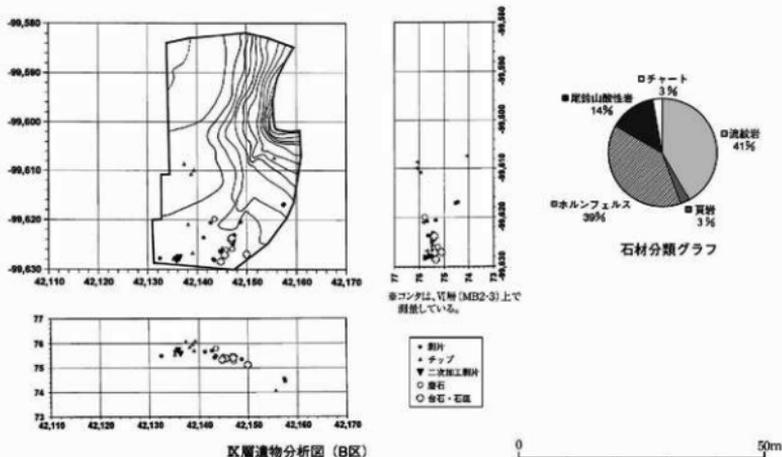
K層遺物分析図 (A区)



石材分類グラフ



第15図 遺物分布図〔第I文化層〕(S = 1/1,000)



第16図 遺物分布図〔第I文化層〕2 (S=1/1,000)

#### 接合資料 2 (第23図)

A区のX層出土の石核1点とIX層出土の剥片3点、VI層出土の剥片1点の計5点が接合している。調査区の東南部に分布し、層が乱れていることから第I文化層のものと判断した。石材は流紋岩源のホルンフェルスである。石核の縁辺部を打面にするこによって、求心状に剥片剥離が行われた状況である。剥離順序は⑥→②→③→①→④の順である。

#### 接合資料 3 (第23図)

A区のX層出土の剥片2点とIX層出土の剥片1点の計3点が接合している。調査区の東南部に分布する。石材は、流紋岩源のホルンフェルスである。剥離順序は①→③→②の順で、打面転移を繰り返しながら剥片剥離を行っている。3点とも幅広く寸詰まりの剥片が剥離されている。

#### 接合資料 4 (第24図)

A区のX層出土の剥片が1点とIX層出土の剥片1点の計2点が接合している。調査区のほぼ中央部に分布する。石材は、砂岩源のホルンフェルスである。

もともと1個体の剥片であり、何らかのアクシデントで分割されている。

#### 接合資料 5 (第24図)

A区のX層出土の石核1点と剥片1点の計2点が接合している。調査区の東南部に分布する。石材は、流紋岩源のホルンフェルスである。打面を石核の縁辺部に設定することで、求心状に剥片剥離を行っている状況である。

#### 接合資料 6 (第25図)

A区のIX層出土の石核1点と剥片13点、VI層出土の剥片1点の計15点が接合している。調査区のほぼ中央に分布する。石材は、流紋岩源のホルンフェルスである。打面転移を頻繁に行った石核から剥片剥離が行われた状況である。石核の所々に階段状剥離の痕跡が窺える。全体的に小型の剥片が多く、このような剥片を目的として剥離作業が行われたものと考えられる。

#### 接合資料 7 (第26図)

B区のIX層出土の石核1点と剥片8点、VI層出土の剥片1点の計10点が接合している。調査区の南端の平坦部から斜面にかけて分布する。石材は、流紋岩源のホルンフェルスである。全ての剥片に素材としての目的があったとは言い難く、アクシデントによる分割なども窺える。剥片はむしろ石核調整のもの可能性がある。

#### 接合資料 8 (第27図)

A区のIX層出土の石核1点と剥片とチップ12点、VI層出土のチップ1点の計14点が接合している。調査区のほぼ中央部に分布する。石材は、流紋岩源のホルンフェルスである。⑥～⑭は石核調整剥片と考えられる。⑯は何らかのアクシデントによって分割されたものであろう。

#### 接合資料 9 (第27図)

A区のIX層出土の石核1点と剥片1点の計2点が接合している。調査区のほぼ中央部より北側に分布する。石材は頁岩である。打面は上下二面に設定されているが、主として上面を打面として利用している。⑳は打面再生剥片であろうか。

#### 【石器】(第28図～第38図)

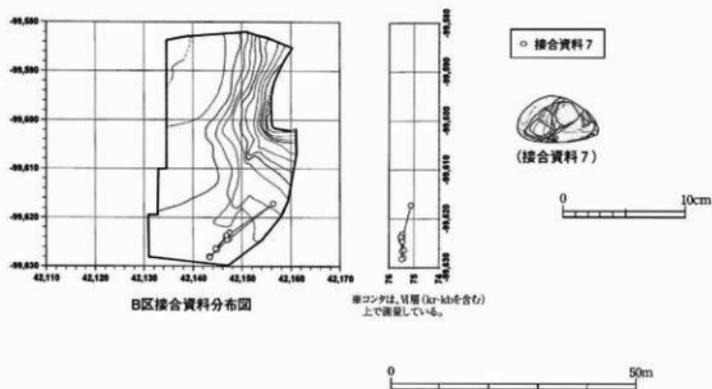
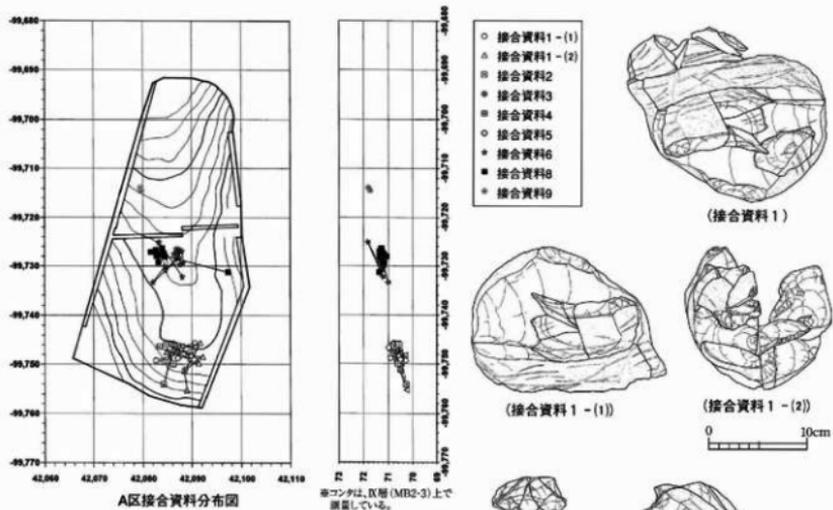
XI層、X層、IX層から石器が出土している。散礫を検出したX層からは石核、磨石、敲石、磨石兼敲石、石皿、台石類が多く出土した点が特徴である。

1はA区のXI層から出土した縦長剥片である。石材は流紋岩源の緻密なホルンフェルスである。本遺跡では最下層の出土となるが、斜面での出土であること、土層断面の観察により茶などの根の影響を受けているとみられることから、上位の層からの落ち込みと判断した。

2～7はA区のX層から出土した石器である。2・3は石核である。石材はいずれもホルンフェルスである。2は流紋岩源の緻密なホルンフェルスで、B類に属するものである。打面転移を繰り返しながら剥片剥離が行われたとみられる。3はC類に属するものであり、残核とみられ風化している。4は二次

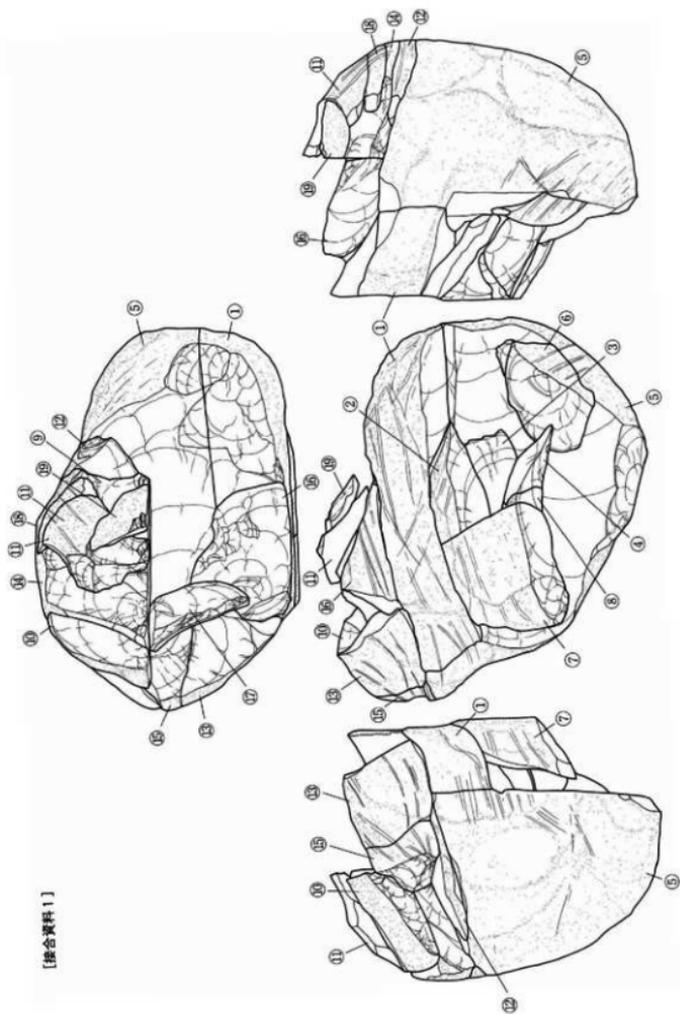
加工剥片で、III類に属する。石材は流紋岩源の緻密なホルンフェルスである。不定形剥片を素材とし、裏面の右側縁に二次加工を施している。5～16は磨石で、I類に属する。5、7～12の石材は、ホルンフェルスである。13～16の石材は砂岩である。12は上部が割れ、研磨痕も明瞭ではないが、他はいずれも広く研磨痕が残っている。17～19は敲石であり、I類に属する。17、19の石材はホルンフェルスであり、18の石材は砂岩である。いずれも敲打痕が残る。20～26は敲石兼磨石であり、I類に属する。20、22～24、26の石材はホルンフェルスであり、21、25の石材は砂岩である。いずれも広く敲打痕や研磨痕が残る。27・28は石皿である。27は砂岩の長楕円形の礫を使用し、表裏の両面に使用痕と思われる痕跡がみられる。28は流紋岩源のホルンフェルスの角張った礫を素材とする。表面に使用痕と思われる痕跡がみられる。29は台石である。尾鈴山酸性岩の角張った礫を素材としている。30は砥石である。流紋岩の棒状の礫を使用し、表裏の両面に使用痕と思われる痕跡を残す。

31～81はIX層から出土した石器である。31～75はA区から出土している。31～41はナイフ形石器であり、石材は全て流紋岩である。31～37はI類aに属する。33は縦長剥片を素材とし、上部を欠損している。37は基部を調整している。38～40はII類aに属する。41はII類eに属し、いわゆる狸谷型と呼ばれる。42～45はスクレイパーである。42、45の石材は頁岩、43の石材は頁岩源の緻密なホルンフェルス、44の石材は流紋岩である。42～44はエンド・スクレイパーで、42はII類に属し、他はI類に属する。45はサイド・スクレイパーでII類に属する。2つに折れた状態で出土し接合した。46～50は二次加工剥片である。46～49はI類に属し、50はII類に属する。46の石材は頁岩源の緻密なホルンフェルスであり、47・48の石材は流紋岩、49・50の石材は頁岩である。49は表面の右側面に微細剥離があり、裏面の右側面に古い剥離がみられる。50は折れて出土したが接合している。折れた後、残った剥片にブランディングを施し再利用している。51～54は使用痕剥片である。51の石材は流紋岩であり、52～54の石材はホルンフェ

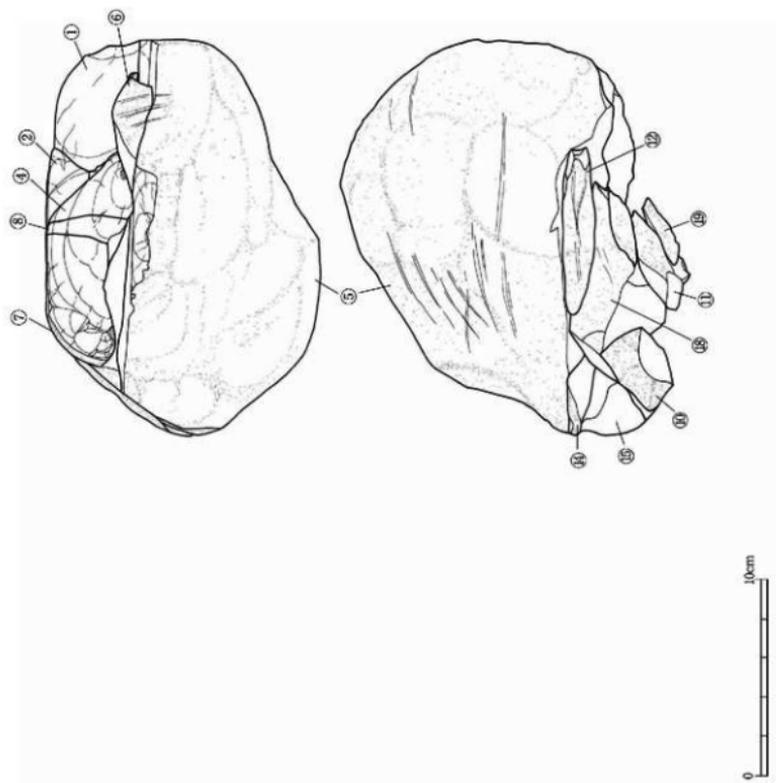


第17図 接合資料分布図(1) (S = 1 / 1,000)

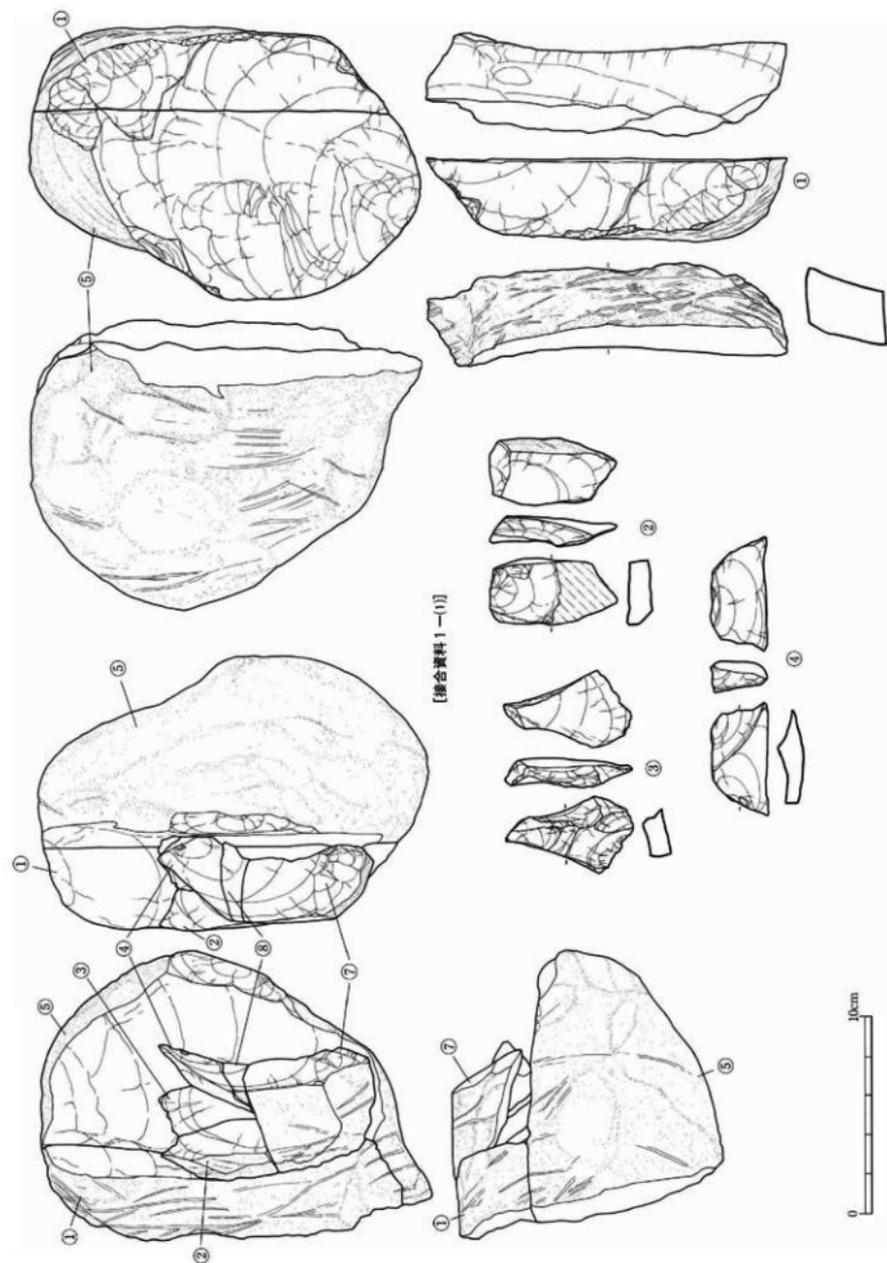
[综合资料1]



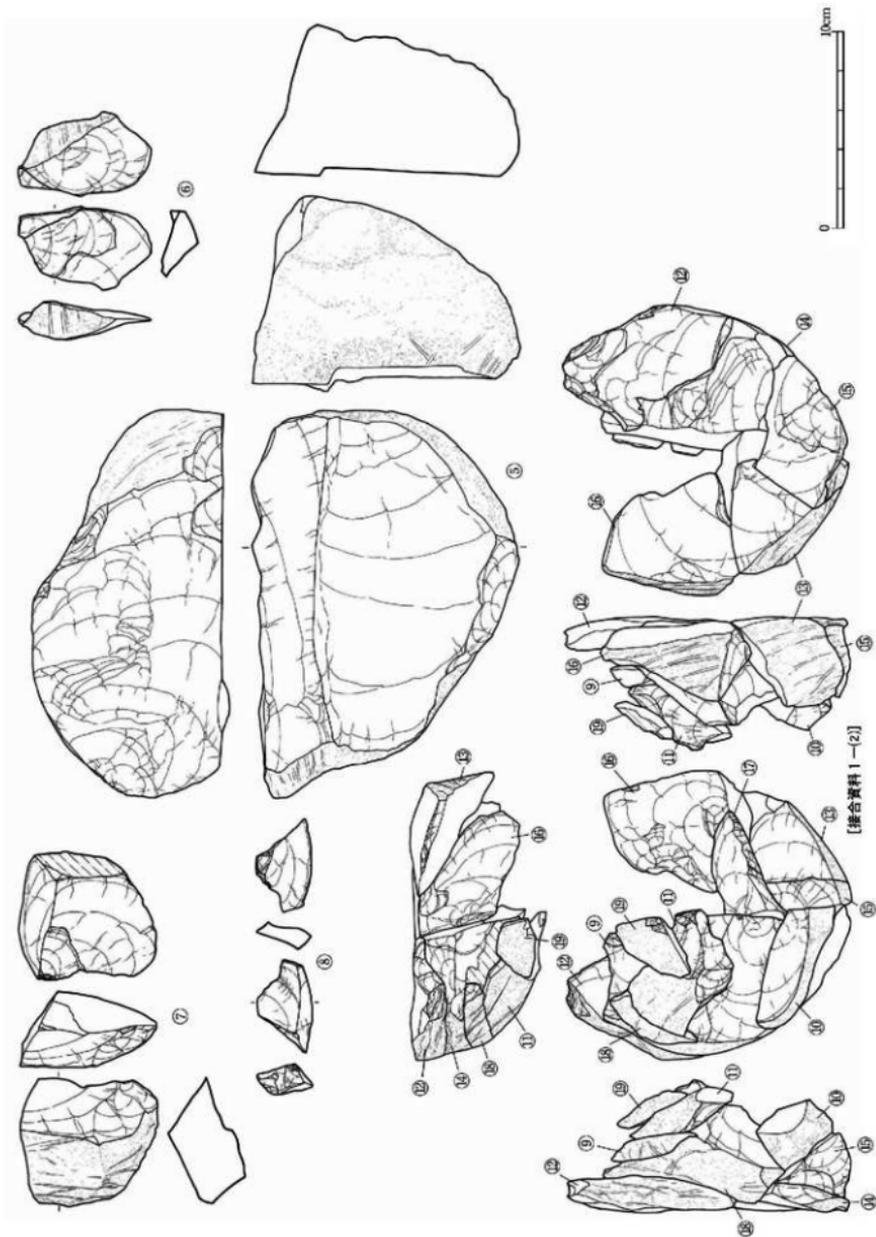
第18图 综合资料1 袋视图(1)



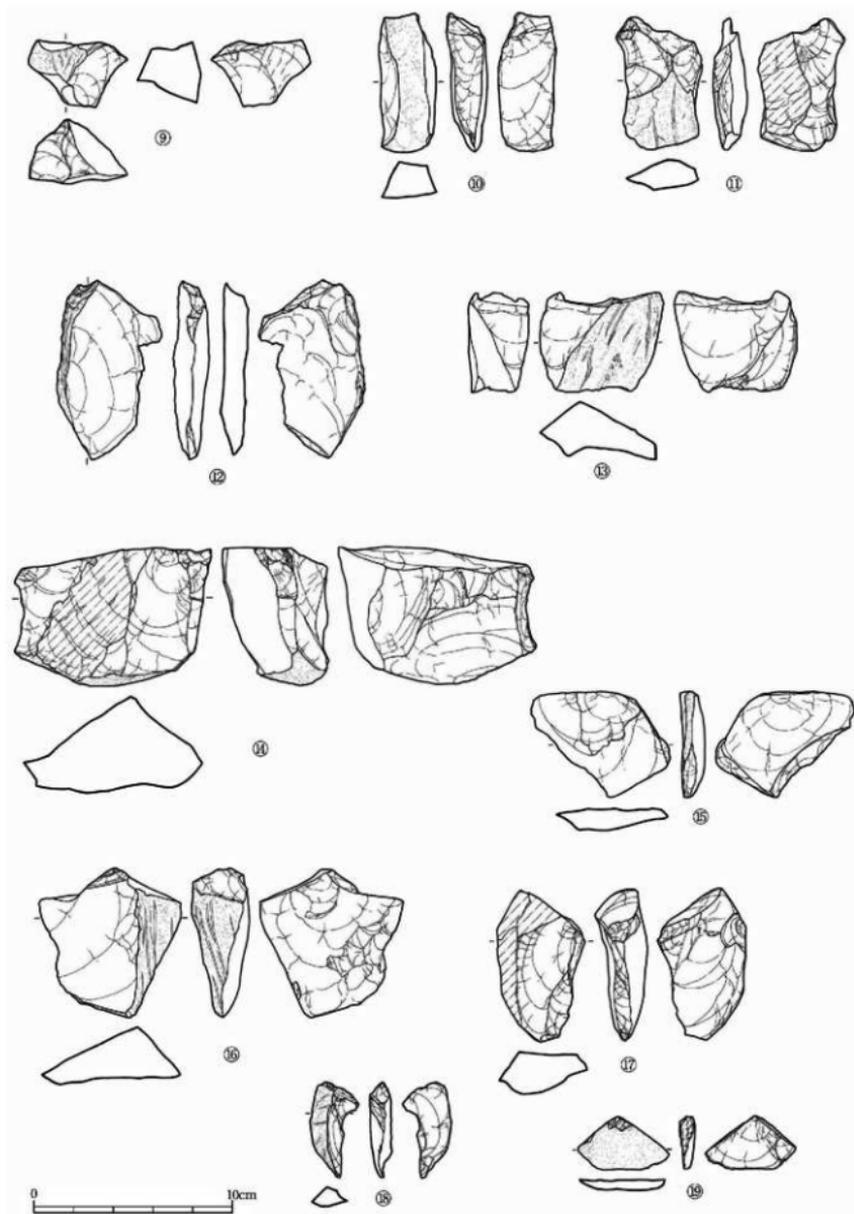
第19圖 栉名鱈科魚類(2)



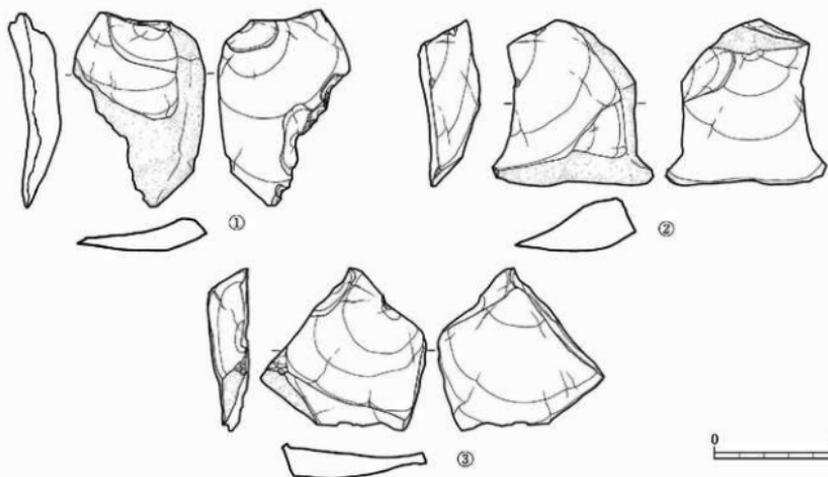
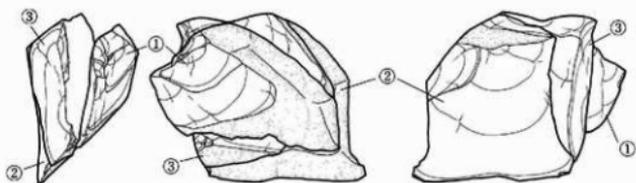
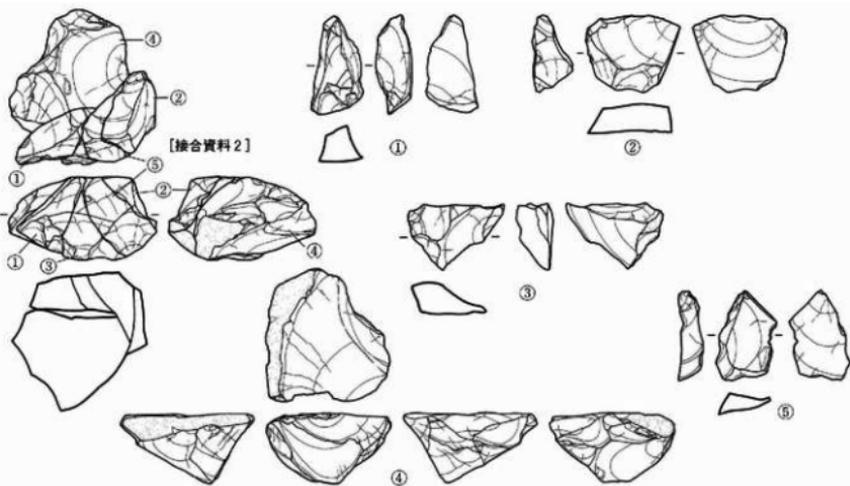
[綜合資料 1-10]



第21圖 接合資料1(2)

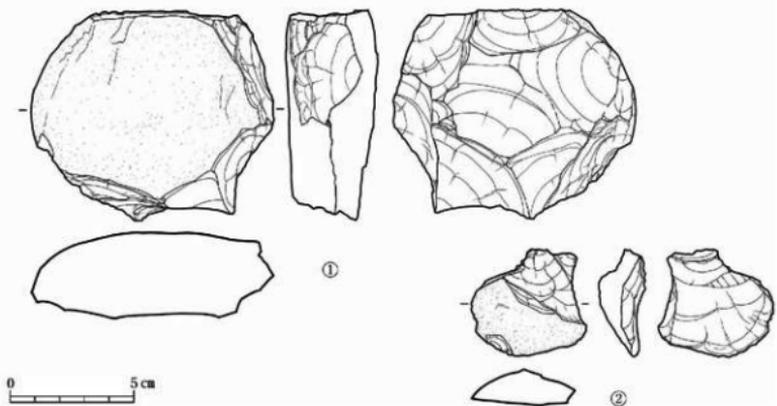
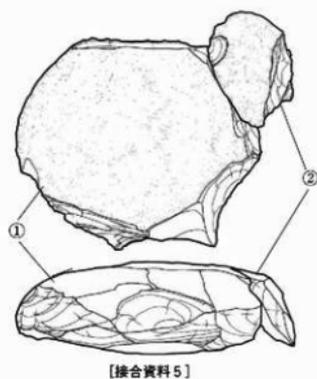
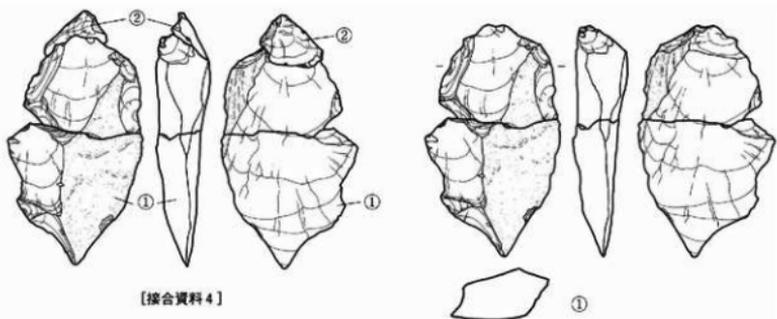


第22图 接合資料1実測図(5)

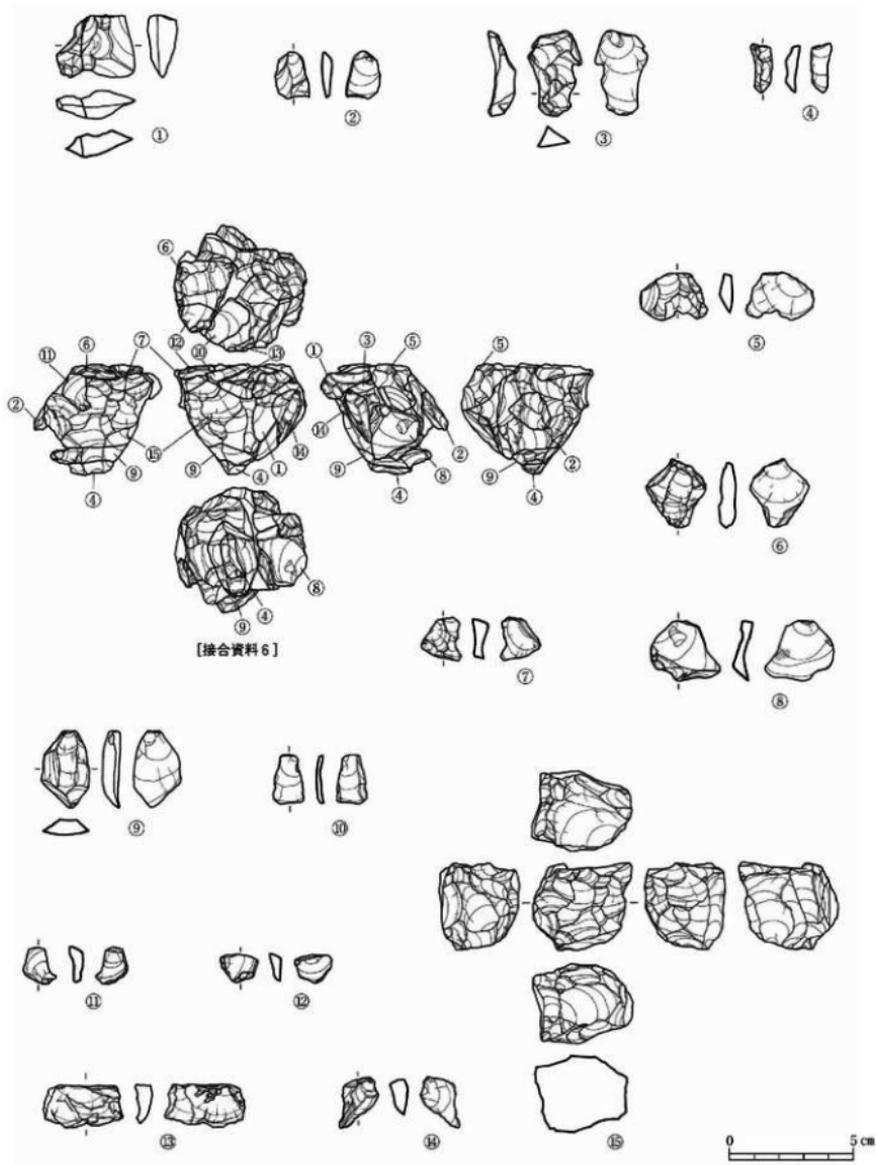


0 5 cm

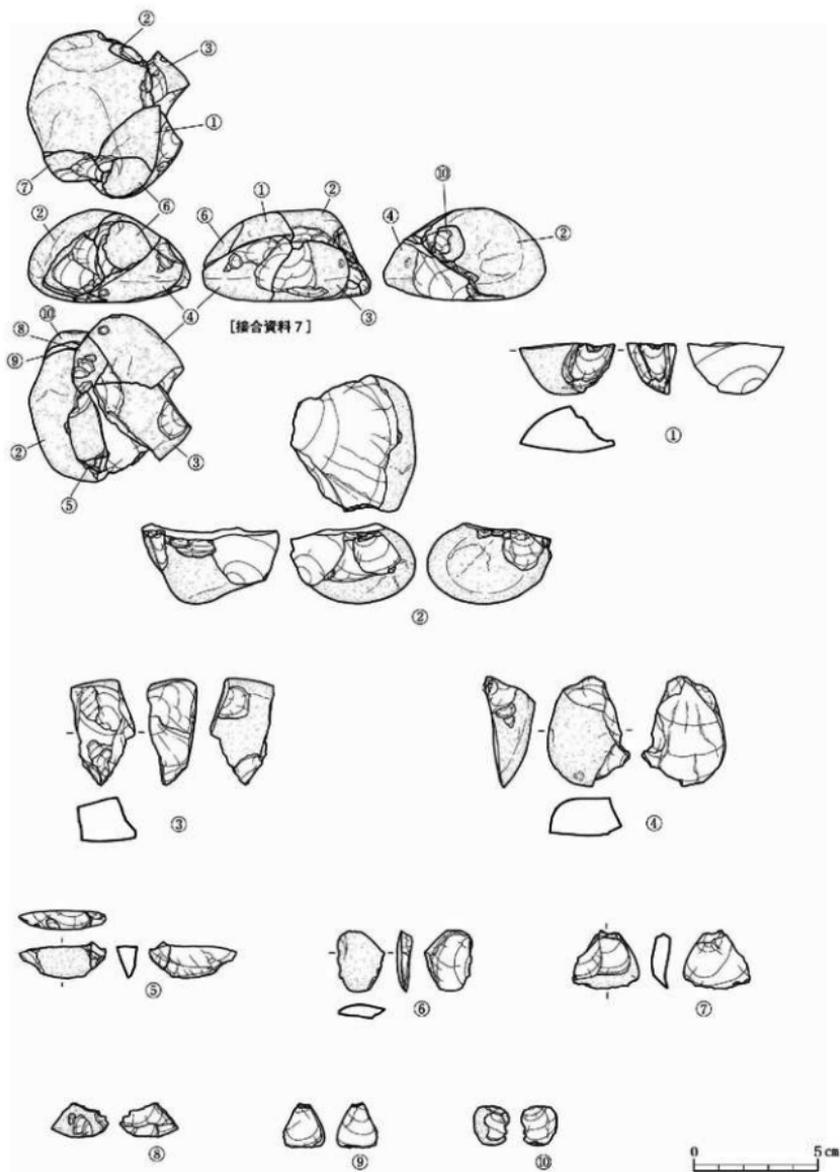
第23図 接合資料2・3実測図



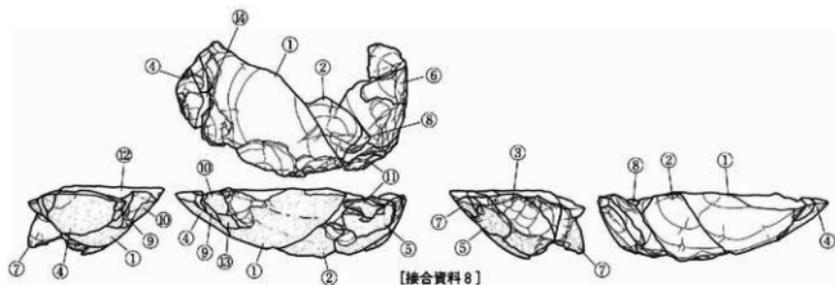
第24圖 接合資料4・5実測圖



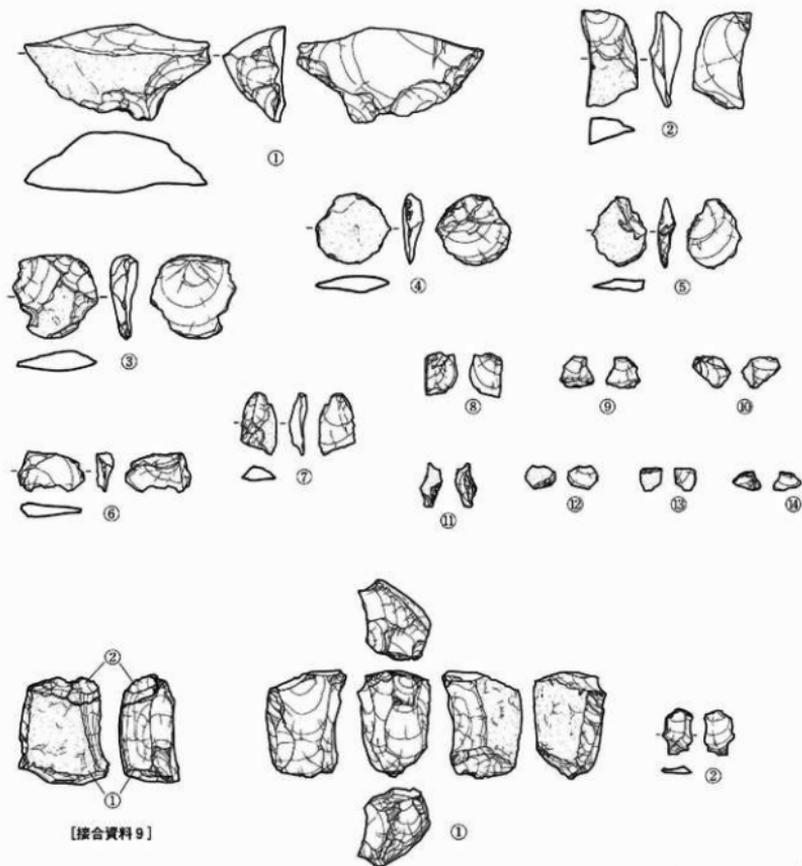
第25図 接合資料6実測図



第26圖 接合資料7実測図



【接合資料 8】



【接合資料 9】

0 5 cm

第27図 接合資料 8・9 実測図

ルスである。51はⅠ類に属し、中でも「ノ」の字形剥片といわれるものである。52～54はⅡ類に属する。54は横長剥片を素材として3/4周程度に使用痕が残る。55～58は小石刃である。石材はいずれも頁岩である。55は石刃素材の使用痕剥片である。56、58は下部を欠損している。57は上部と下部を欠損しているが二次加工がみられる。58は欠損面にわずかに加工がみられる。59・60は細石刃である。59の石材は頁岩で、60の石材は黒曜石である。60は上部を欠損している。61～64は磨石であり、Ⅰ類に属する。61の石材はホルンフェルスで、赤化している。62、64の石材は砂岩、63の石材は流紋岩である。表裏の両面に研磨痕がみられる。65～68は敲石である。65の石材はホルンフェルス、66～68の石材は砂岩である。全てⅠ類に属し、敲打痕が明瞭である。69～72は敲石兼磨石である。69の石材は砂岩、70・71の石材は流紋岩、72の石材はホルンフェルスである。69・70はⅠ類に属し、71・72はⅡ類に属する。いずれも広く敲打痕や研磨痕が残る。73・74は台石である。73は尾鈴山酸性岩の角張った礫を素材とし、赤化している。74は粗流組織のホルンフェルスの楕円の礫を素材としている。75は石皿である。粗流組織のホルンフェルスの角張った礫を素材とし、赤化している。

76～80はB区から出土している。76・77は二次加工剥片であり、Ⅰ類に属している。76の石材は流紋岩、77の石材は頁岩源の緻密なホルンフェルスである。76は縦長剥片を素材に裏面の右側縁に二次加工

を施す。77も縦長剥片を素材とし、裏面の左下側縁に二次加工を施す。78は磨石であり、Ⅰ類に属する。石材は尾鈴山酸性岩で、表裏、右側面に研磨痕が残る。79はSI003で出土した磨石である。Ⅰ類に属する。石材は砂岩源のホルンフェルスである。80は台石である。SI002から出土している。尾鈴山酸性岩の三角形の礫を素材にし、赤化している。81は石皿である。粗流組織のホルンフェルスの三角形の礫を素材としている。使用痕跡が明瞭でなく自然礫の可能性もある。

82はC区から出土した使用痕剥片である。石材は流紋岩である。Ⅱ類に属し、横長剥片の下部に使用痕がみられる。

### (3) 小結

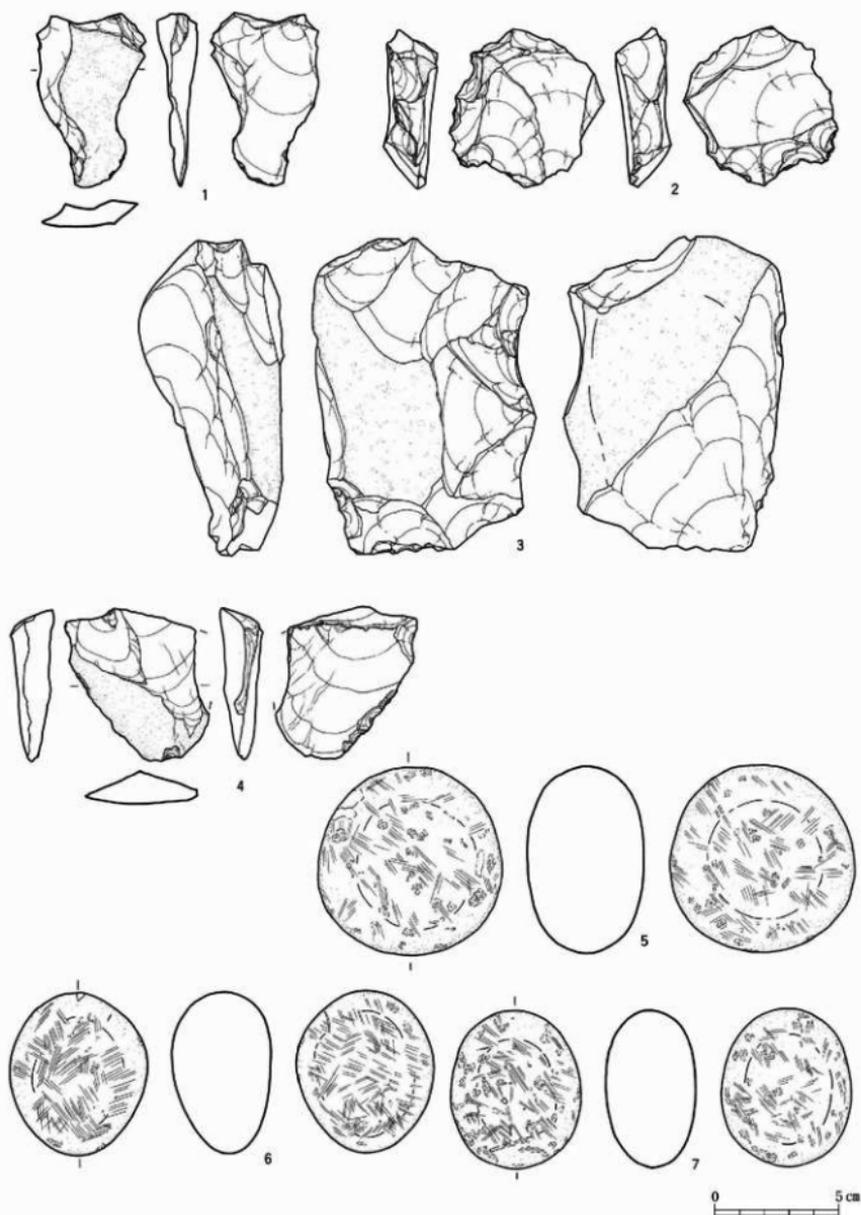
A区では、敲礫と石器ブロックを2箇所検出した。敲礫のうち赤化した礫の分布をみると、赤化礫の集中箇所が2箇所確認でき、石器も同じ箇所に集中している。また、接合資料の分布も同じ箇所にみられる。しかし、いずれも同じ時期に火を使用した箇所での石器製作を示唆するような状況とは言い難いが、何らかの活動があったことは推察できよう。

B区では礫群を3基検出した。礫はある程度まとまりがあり、接合資料の剥片も分布している。

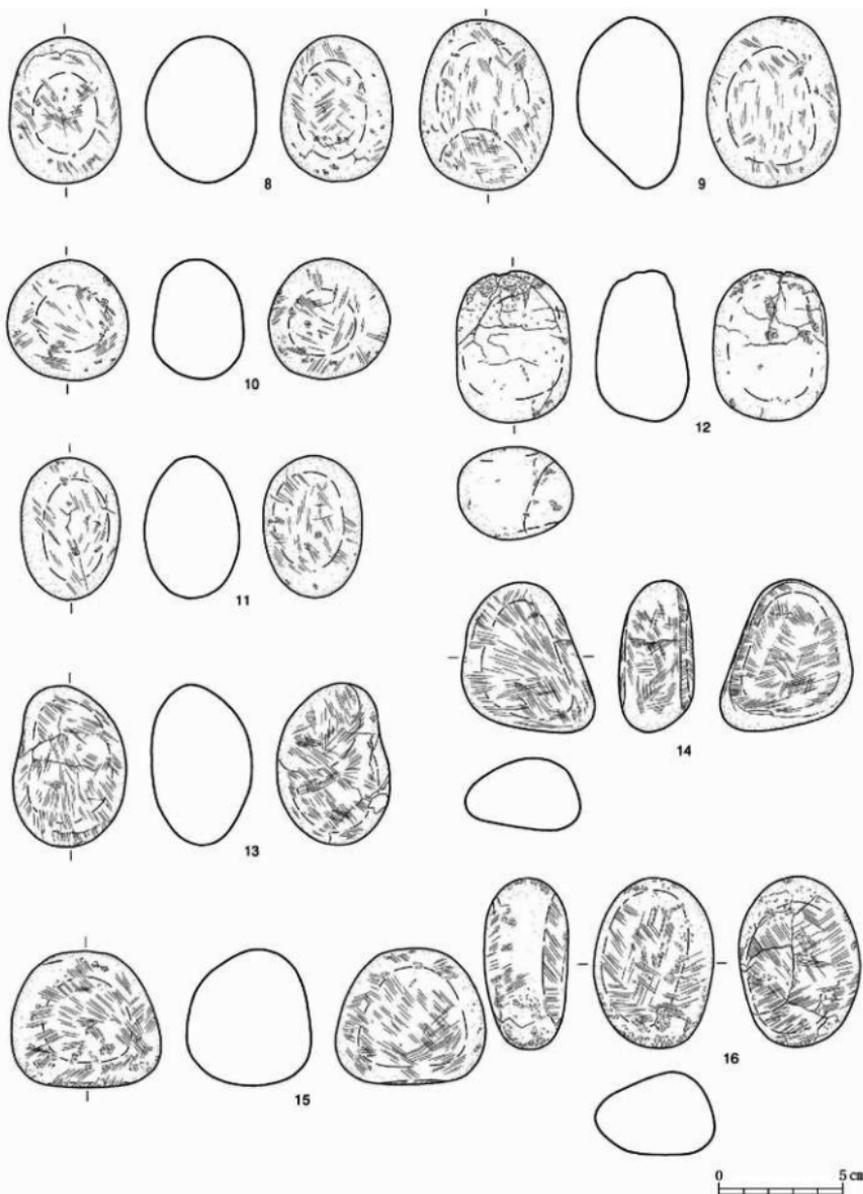
遺物は、X層では敲石や磨石、磨石兼敲石、台石・石皿などの大型の礫石器が多く出土している。IX層ではナイフ形石器・スクレイパー・二次加工剥片・使用痕剥片などが出土している。

第1表 第Ⅰ文化層石材別石器組成表

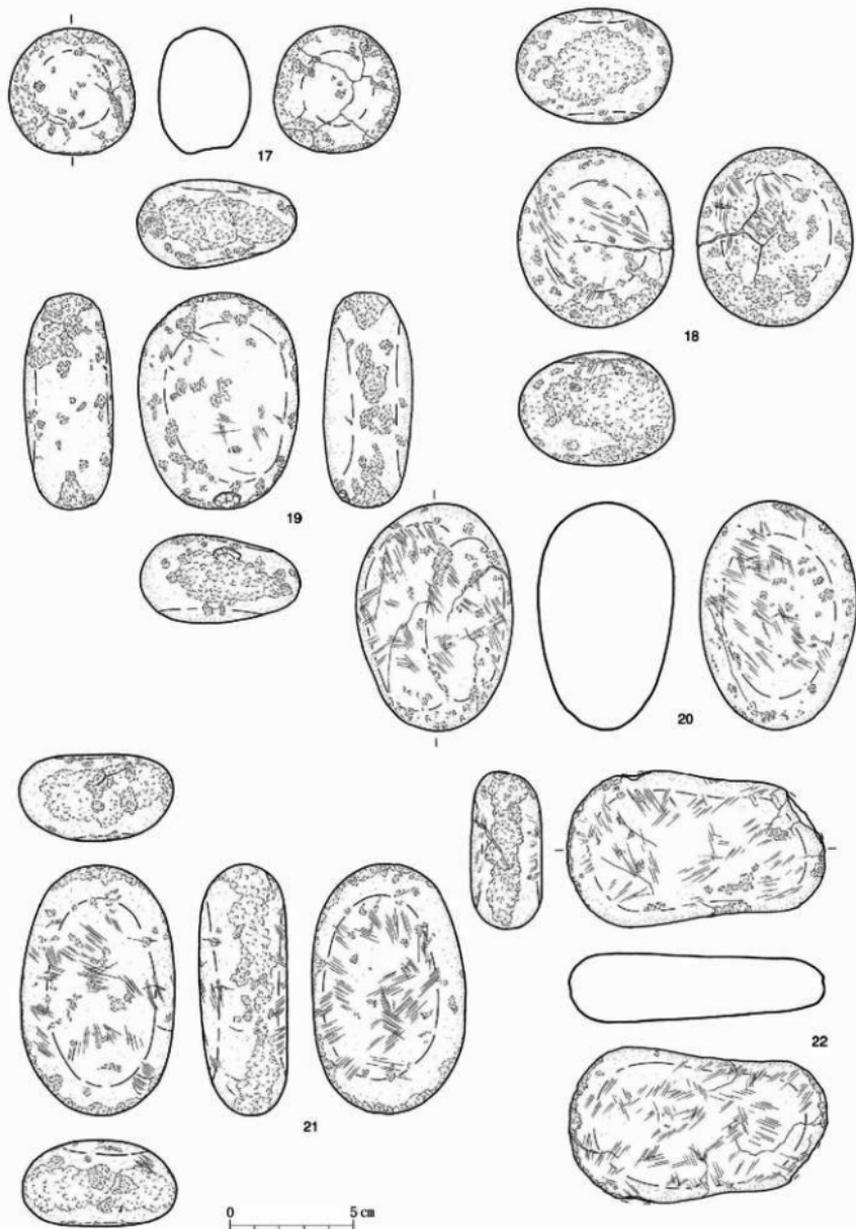
	ナイフ形石器	スクレイパー	二次加工剥片	使用痕剥片	石刃	細石刃	石核	剥片	チップ	磨石	敲石	磨石兼敲石	石皿	台石	礫器	計
黒曜石			1			1	1	5								8
チャート								6	17							23
頁岩		3	4		4	1	1	4								17
流紋岩	11	1	6	3				120	42	2	1	1				187
ホルンフェルス	1	1	2	3			6	93	13	18	5	4	6	10	1	163
砂岩											9	3	4	2	2	20
尾鈴山酸性岩										2			5	13		20
計	12	5	13	6	4	2	8	228	72	31	9	9	13	25	1	438



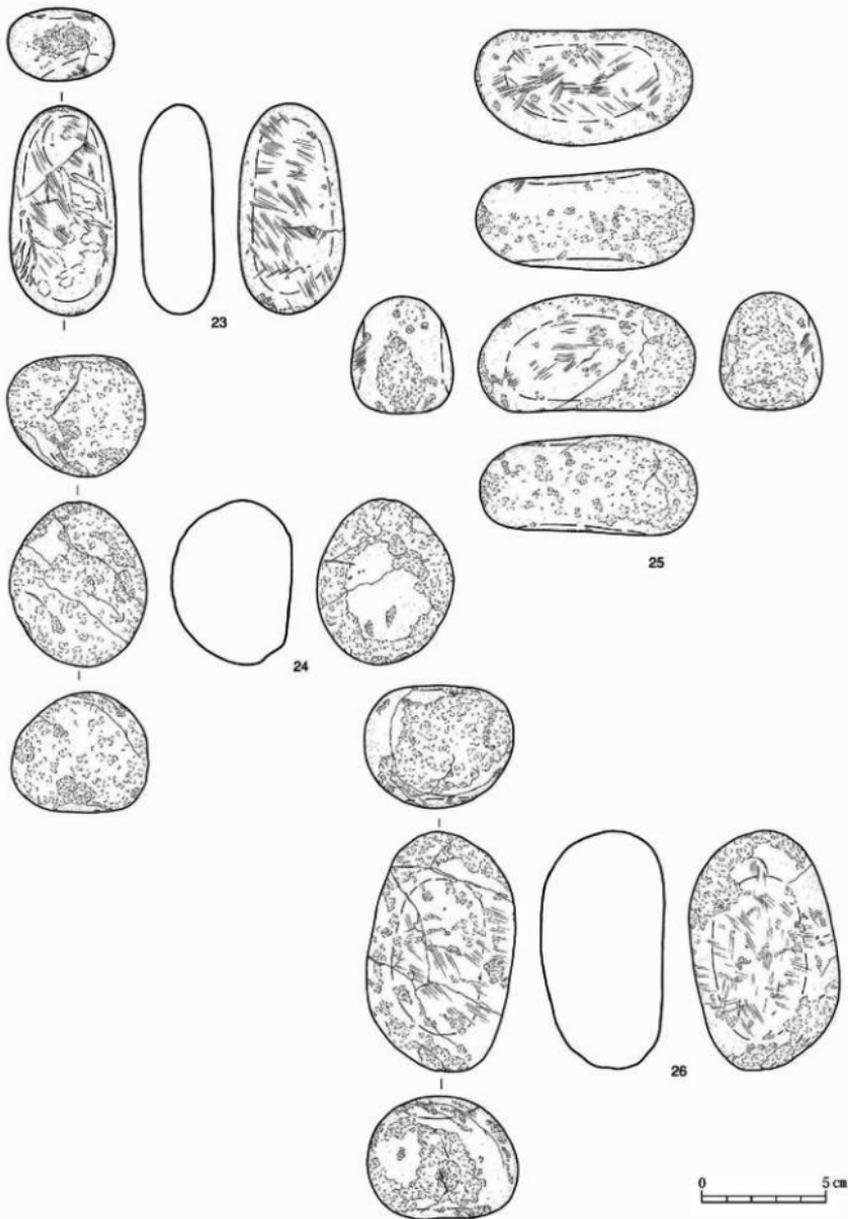
第28图 XI·X层出土遗物实例图(1)(A区)



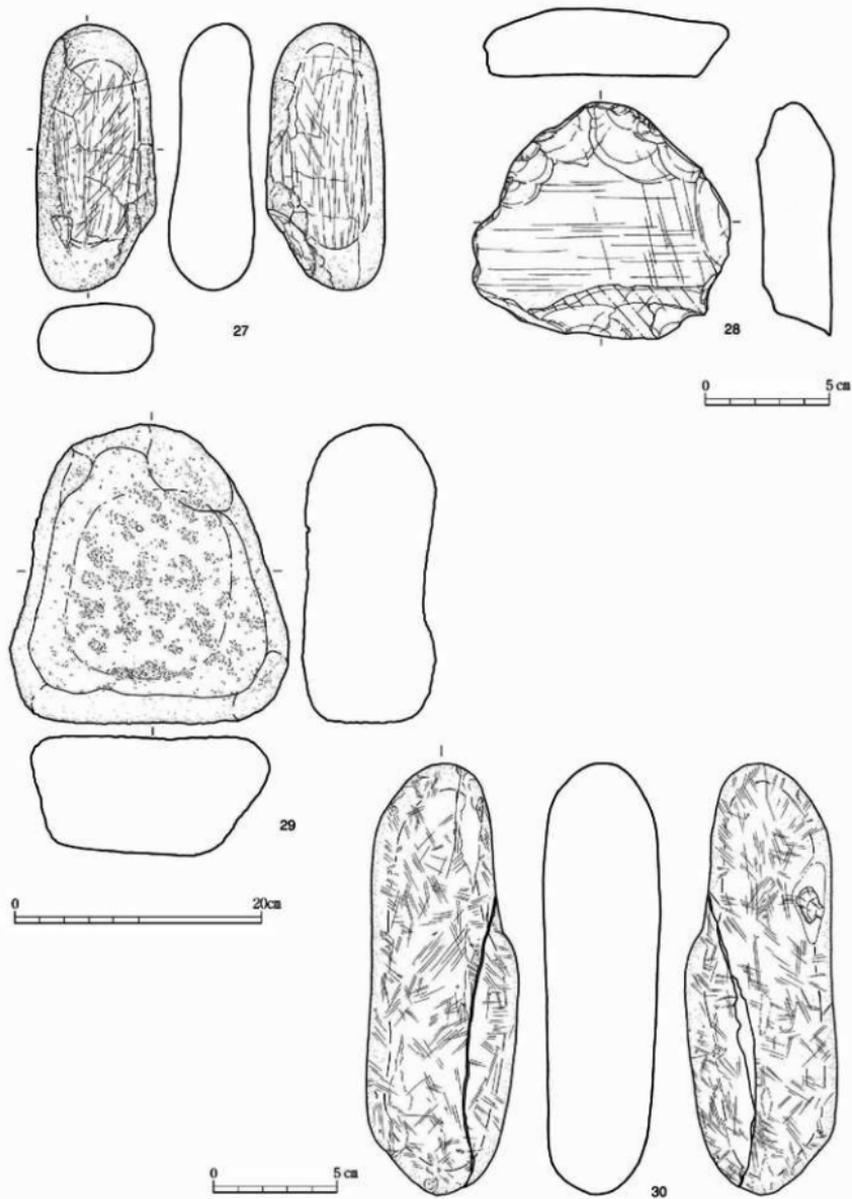
第29图 X层出土器物实测图(2)(A区)



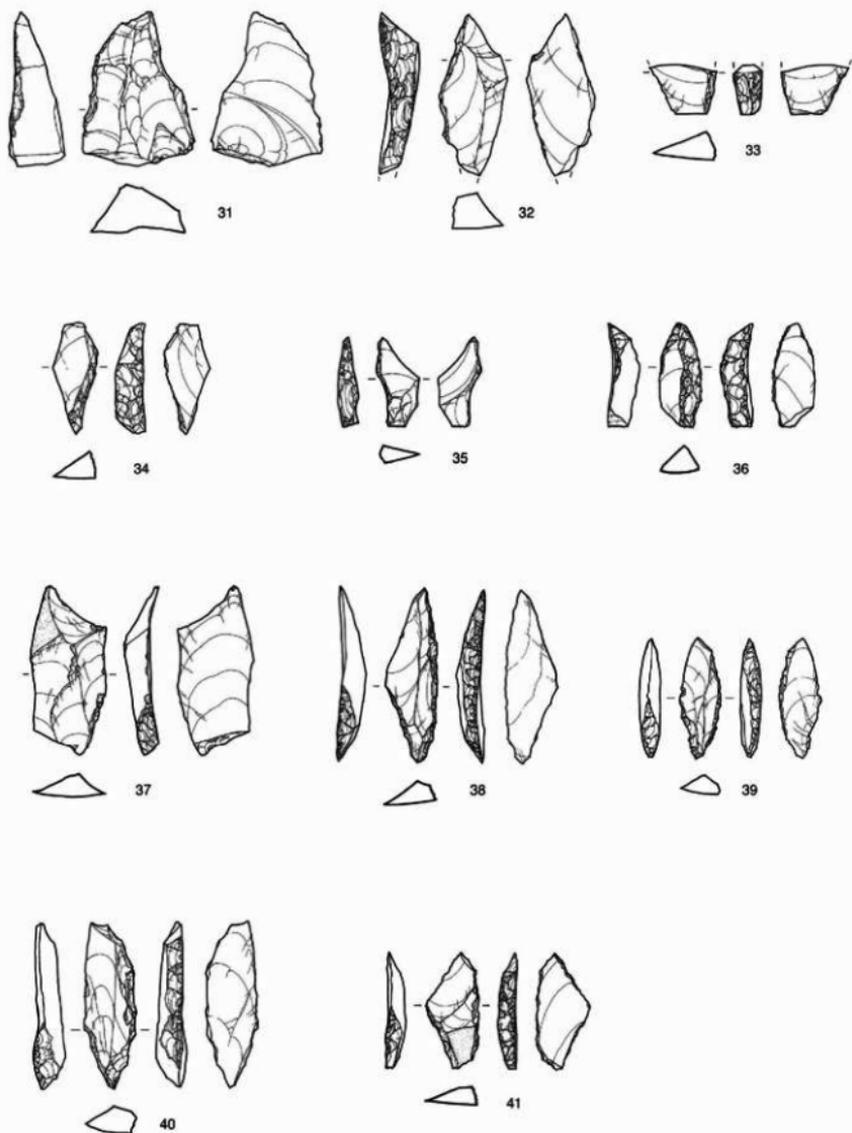
第30图 X层出土遗物实例图(3) (A区)



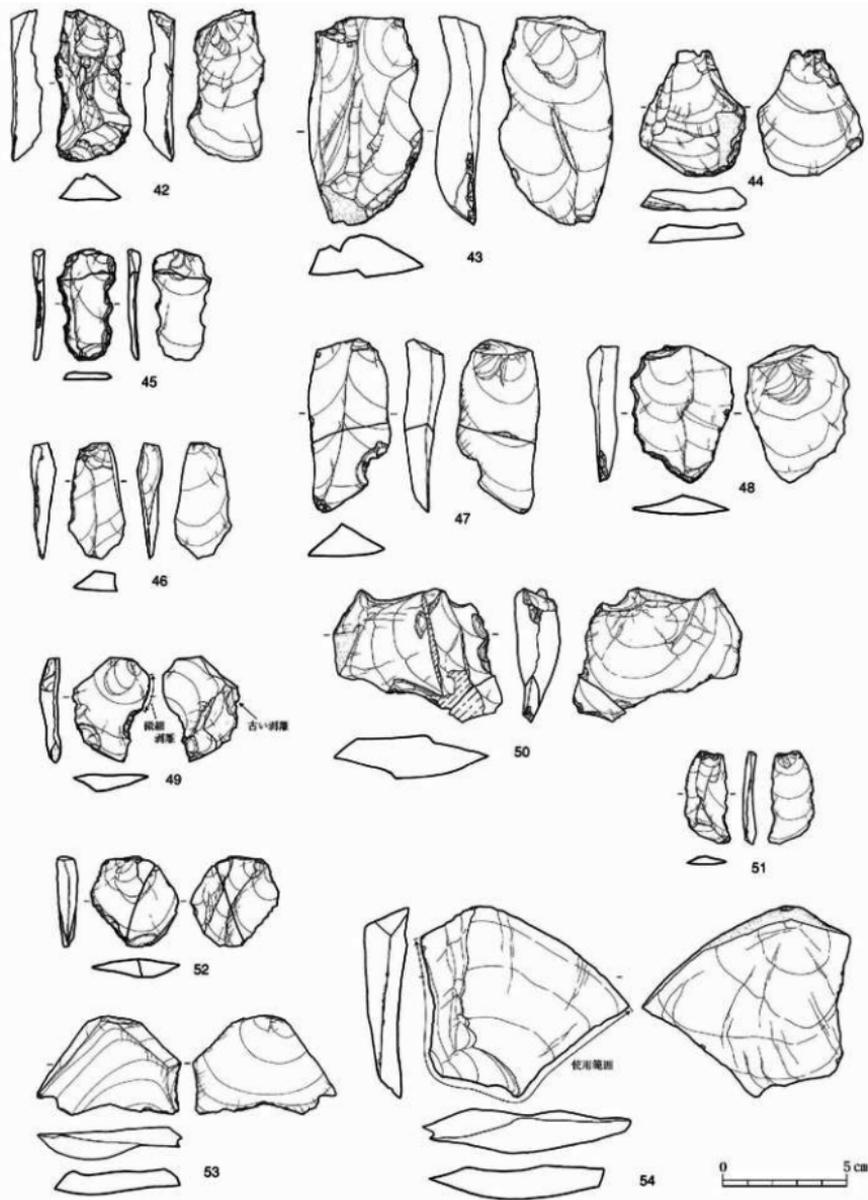
第31图 X层出土遗物实例图(4) (A区)



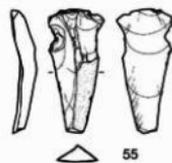
第32图 X层出土物实测图(5) (A区)



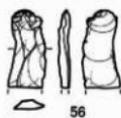
第33图 双层出土遗物实例图(1)(A区)



第34图 双层出土器物实例图(2) (A区)



55



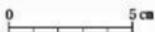
56



57



58



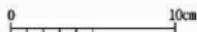
61



59



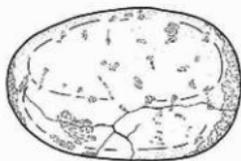
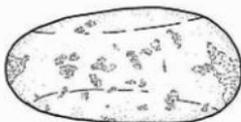
60



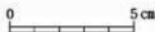
62



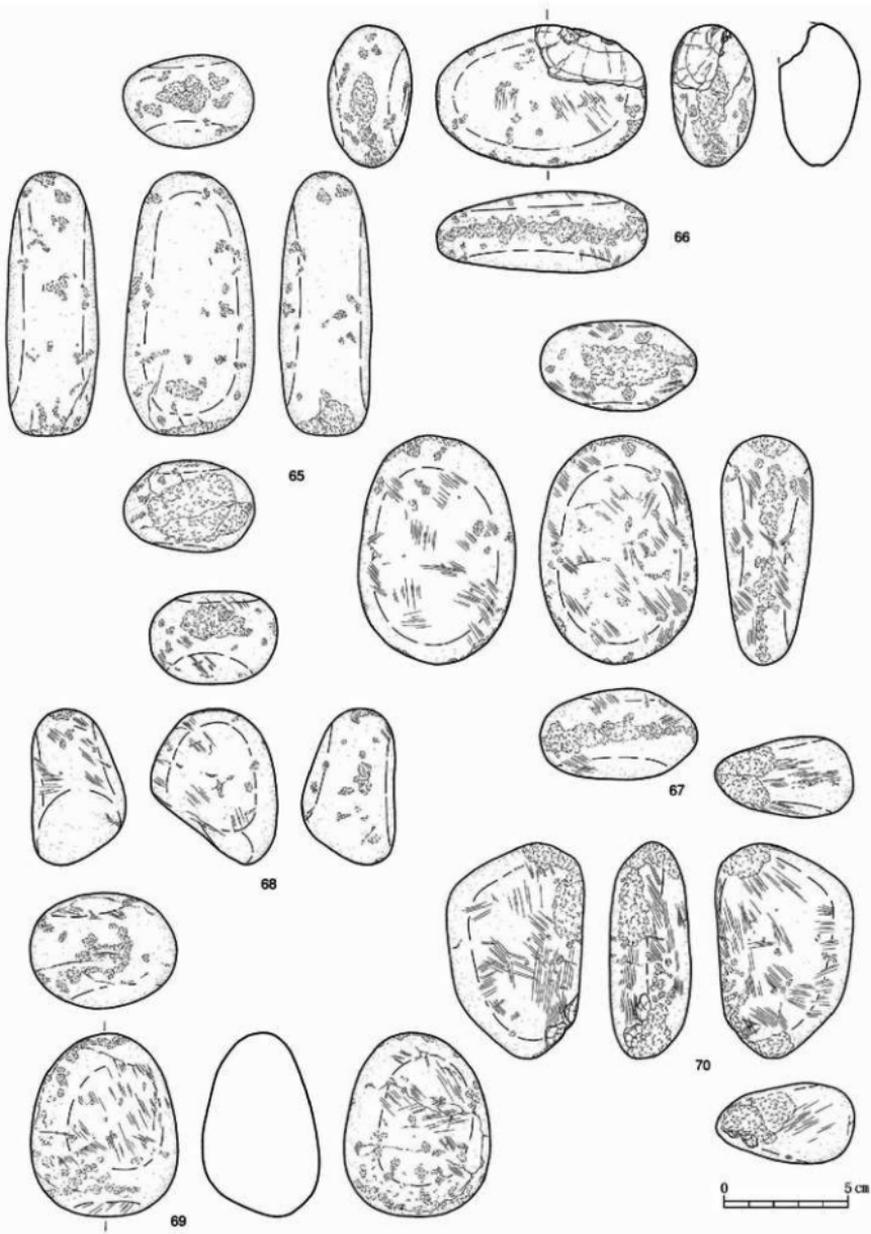
63



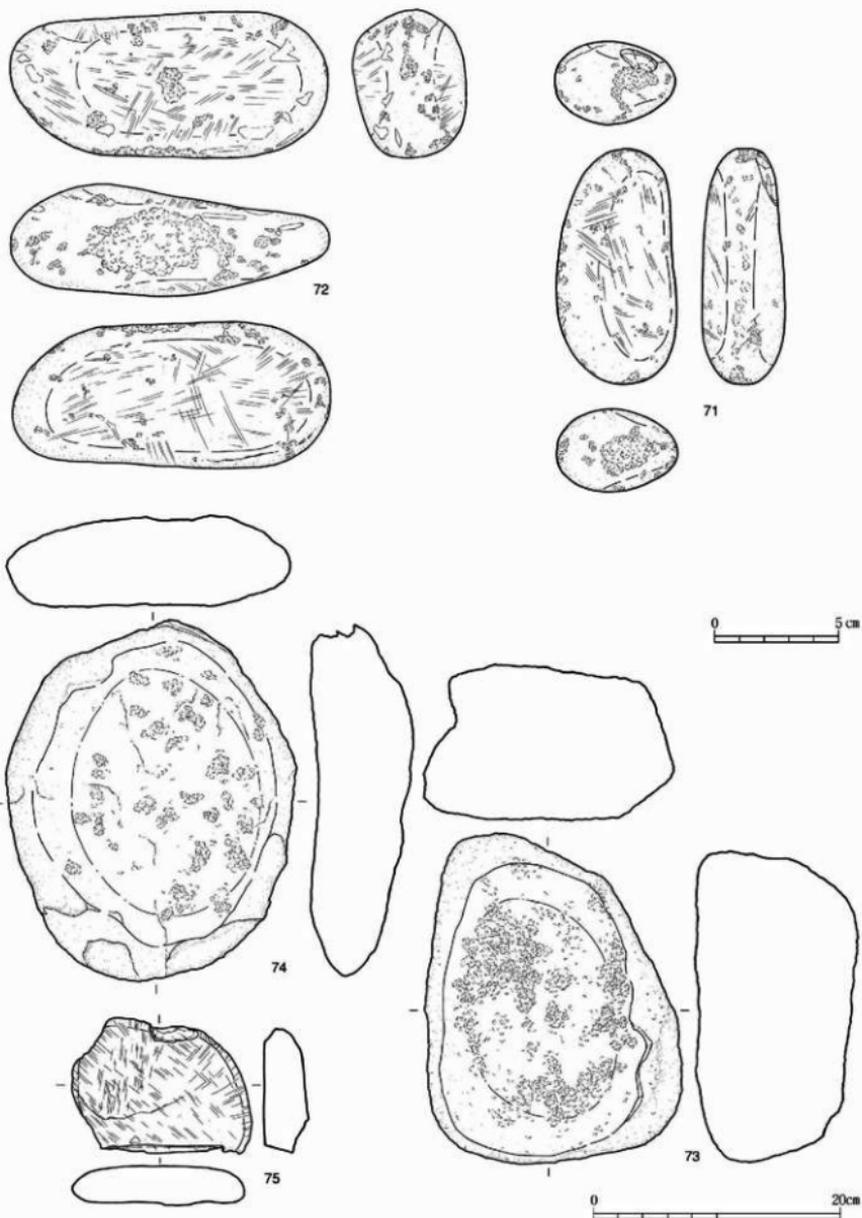
64



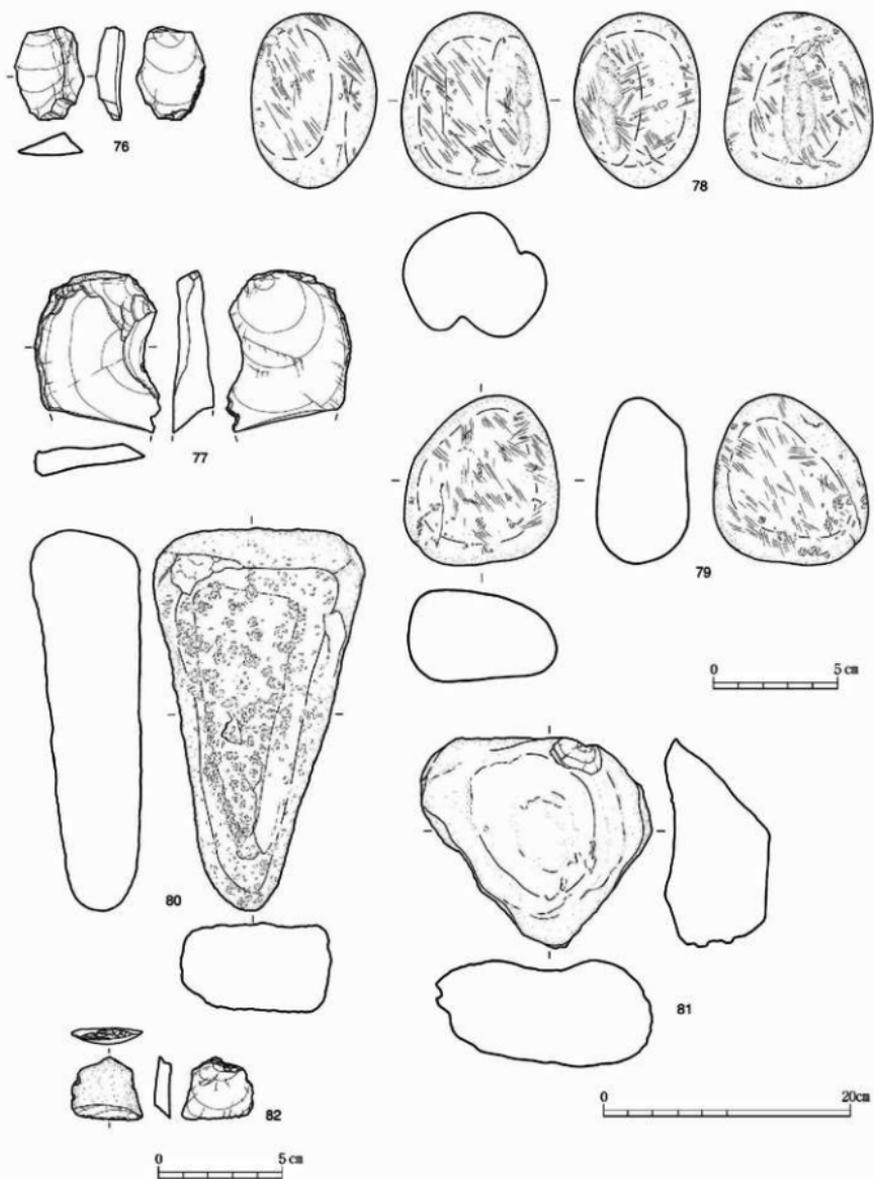
第35图 Ⅱ层出土物实例图(3) (A区)



第38图 Ⅱ层出土物实例图(4) (A区)



第37图 Ⅱ层出土物实例图(5)(A区)



第38图 Ⅱ层出土物实例图(6) (B·C区)

## 2 第Ⅱ文化層の遺構と遺物

第Ⅱ文化層は、Ⅷ層～Ⅵ層からなる。遺構としてA区とB区、D区で礫群がⅥ層下位からⅧ層上面にかけて検出されている。遺物は主にⅥ層から出土している。

### (1) 遺構 (第9図、第10図、第42図)

遺構としてⅥ層下位～Ⅷ層上位で礫群を3基検出している。また、石器ブロックが2箇所確認された。

### 【礫群】 (第39図～第40図)

礫群をA区で2基、C区で1基確認した。A区で確認したSI101は、礫が密集し輪郭が明瞭で周辺に礫が分散していない密集型である。A区のSI102とC区のSI103は、礫が密集したり集中する部分があり、その周辺に礫が分散している集中型である。

#### S I 101 (第39図)

A区のC18グリッドで確認された。Ⅵ層(Kr-Kbを含む)の掘り下げ中に検出した。礫は集石遺構に比べて疎であり、掘り込みはない。礫の総数は150個で、総重量は46kgである。石材はホルンフェルスが7割を占める。礫の完形率は、40%未満が8割であり、角礫、亜角礫が多い。礫の9割は赤化している。

#### S I 102 (第40図)

A区のE19グリッドで確認した。Ⅵ層(Kr-Kbを含む)の掘り下げ中に検出した。礫は疎であり、掘り込みはない。礫の総数は16個で、総重量は9.94kgである。石材はホルンフェルスが7割を占める。礫の完形率は、完形のもの4割、40%未満も4割である。礫の6割が赤化している。

#### S I 103 (第40図)

D区のF6グリッドで確認した。Ⅵ層(Kr-Kbを含む)の中から検出した。礫の広がり疎である。礫の総数は18個で、総重量は5.27kgである。石材はホルンフェルスが7割を占める。礫の完形率は、完形のもの3割、90%未満～40%のもの4割を占め

る。礫は8割が赤化しているが7割が赤化が弱い。

### 【石器出土状況】 (第41図～第44図)

第Ⅷ層から第Ⅳ層まで石器が出土している。各層ごとの石器の分布状況を、第41図～第44図として掲載している。これらの分布状況を見ると、A区では、調査区の中央部が削平されたため、遺物の分布がみられないが、Ⅵ層において流紋岩を主体とした石器群が出土しており、接合資料の分布と合わせてみると、2箇所の石器集中箇所が確認された。

#### 第3ブロック (第42図)

調査区の中央部の西側に位置する。石器組成は、ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・石刃・二次加工剥片・使用痕剥片・石核・剥片・台石・石皿である。チャートと珪質頁岩の石核と剥片がそれぞれ接合している状況である。石器組成において石器製作に関連する石器がみられることから、石器製作の場としての機能が作用していた可能性がある。

#### 第4ブロック (第42図)

調査区の中央部の北部に位置する。石器組成は、石鎌・使用痕剥片・石核・剥片・チップ・磨石・蔽石・台石・石皿である。流紋岩源のホルンフェルスの石核と剥片の接合している状況である。石器組成において石器製作に関連する石器がみられることから、石器製作の場としての機能が作用していた可能性がある。

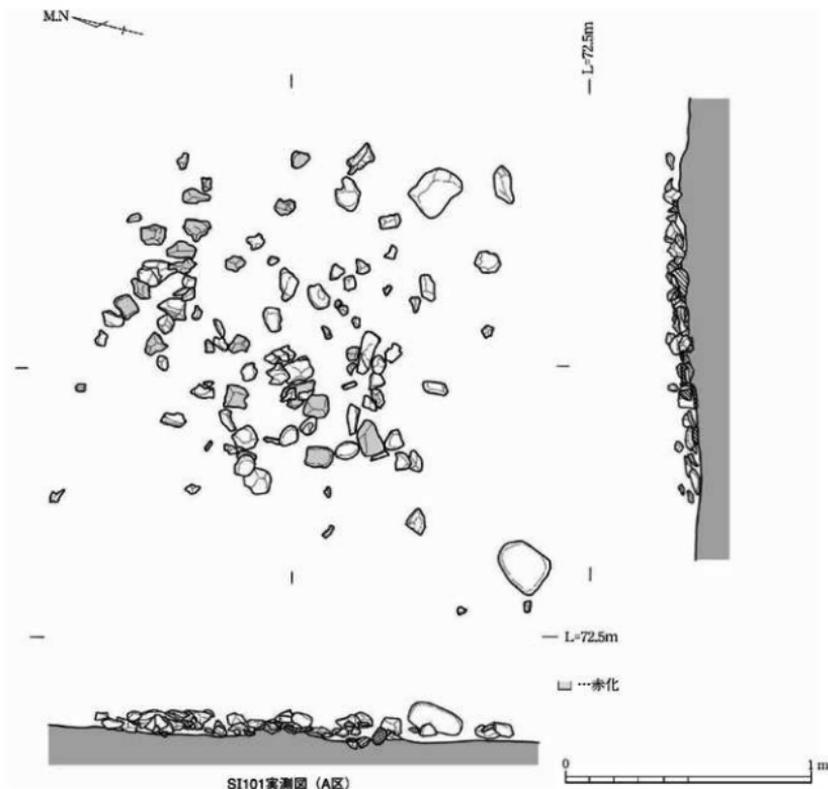
### (2) 遺物

#### 【接合資料】 (第45図)

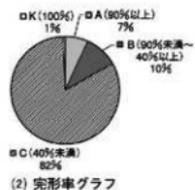
A区では、第Ⅰ文化層の分布とは異なり、調査区の中央部の東側と西側、南端部に分布している。このことは、調査区の中央部が後世の畑地の造成などで削平されている影響とみられる。

#### 接合資料10 (第46図)

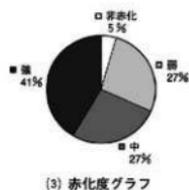
A区の一括で取り上げた石核1点と剥片4点、Ⅷ層出土の剥片1点の計6点が接合している。調査区の中央から北側の部分と客土の堆積した南西部に分



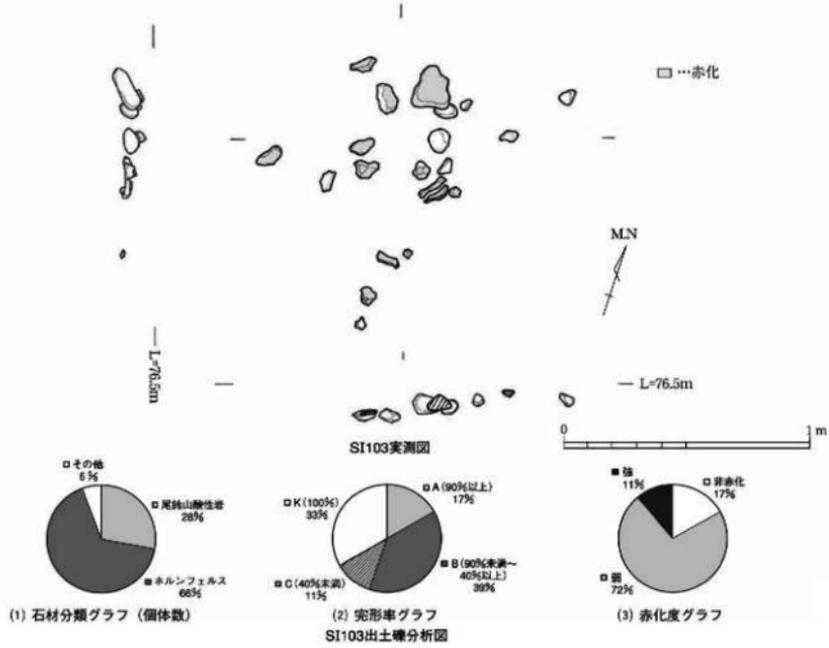
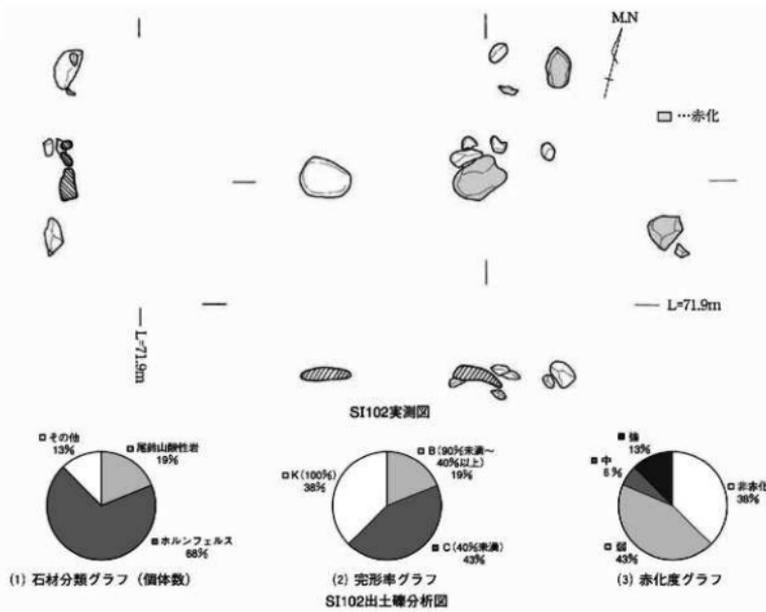
SI101実測図 (A区)



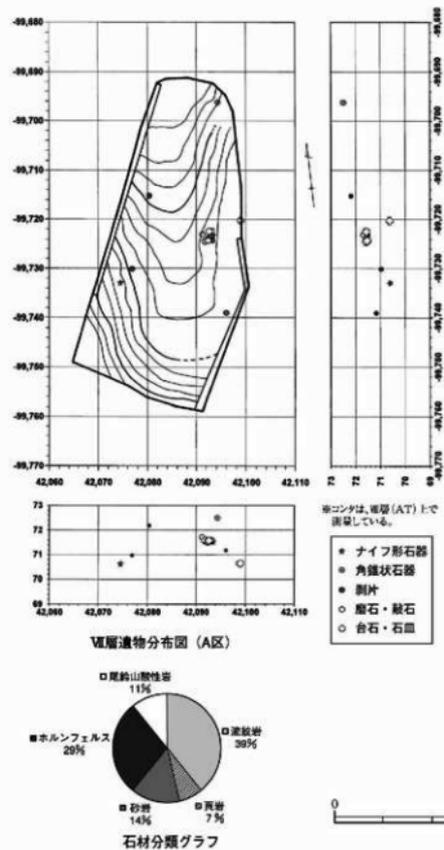
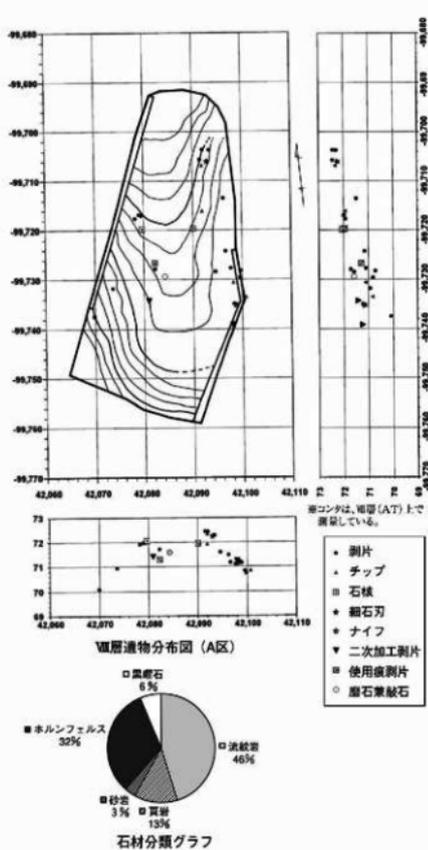
SI101出土礫分析図



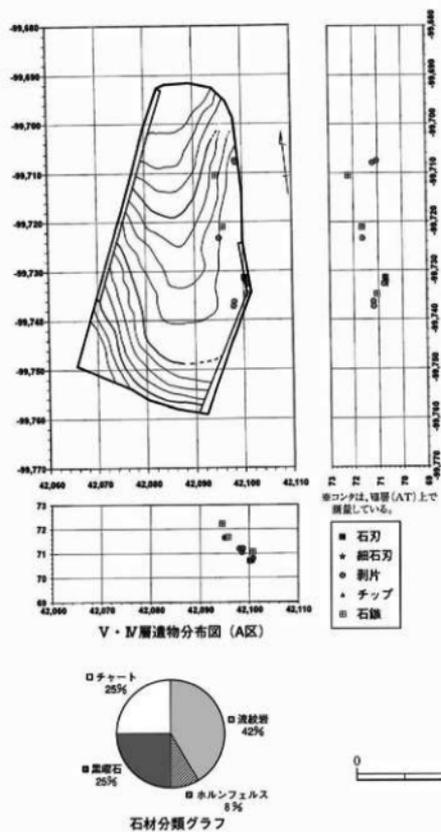
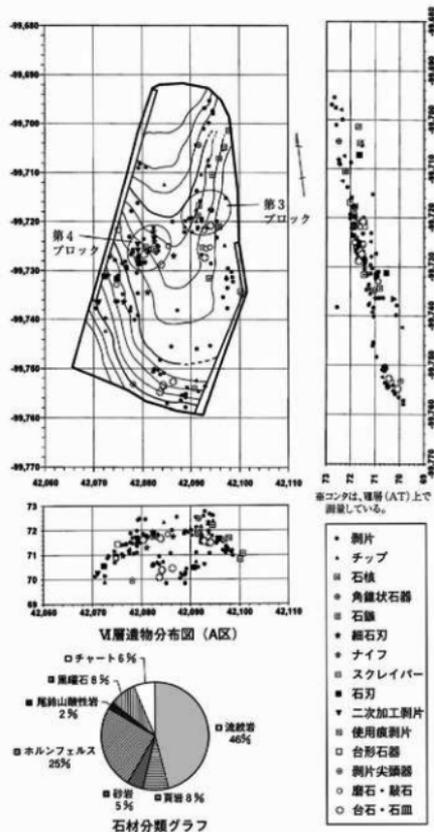
第39図 様群実測図〔第Ⅱ文化層(1)〕



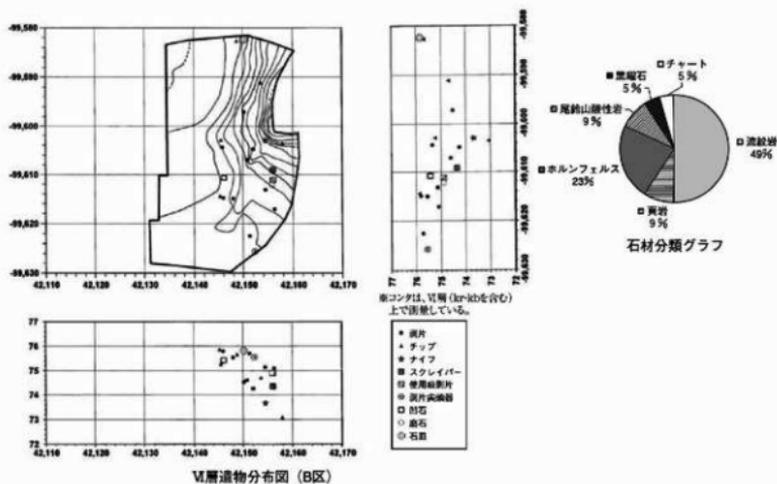
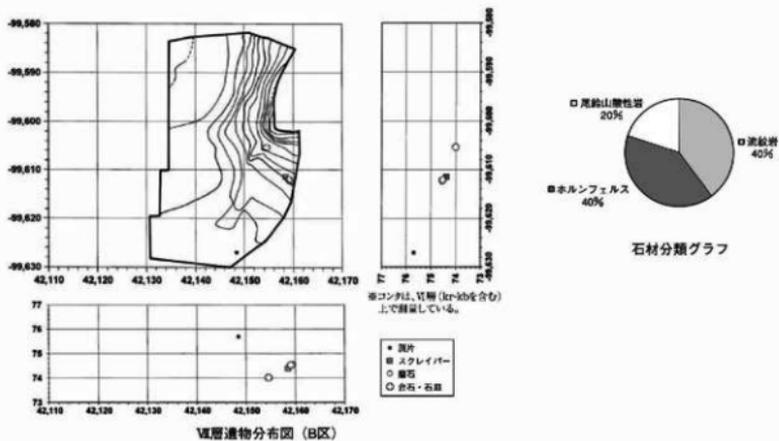
第40図 雑群実測図〔第Ⅱ文化層〕2



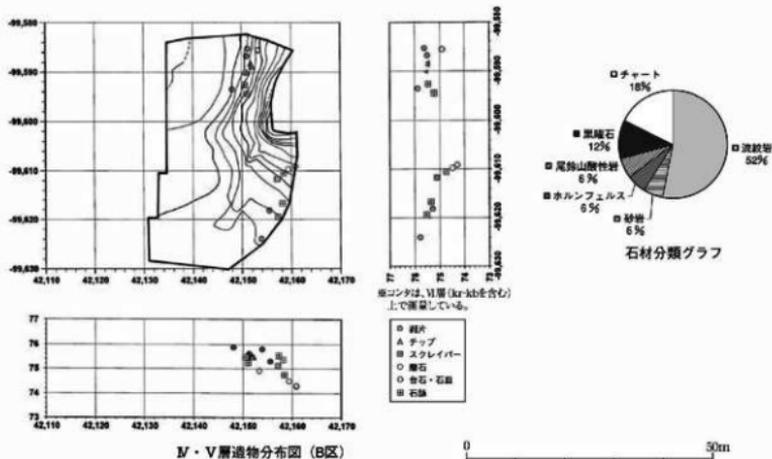
第41図 遺物分布図〔第Ⅱ文化層〕1) (S = 1 / 1,000)



第42図 遺物分布図〔第Ⅱ文化層〕(2) (S = 1 / 1,000)



第43図 遺物分布図〔第Ⅱ文化層〕3)



第44図 遺物分布図〔第Ⅱ文化層〕4) (S=1/1,000)

布している。南西部の客土は耕作地を確保するために削平された土が堆積したものとみられる。石材は頁岩である。④の石核を中心に剥片剥離が行われている。①、②は同一方向から剥離されており、②→①の順序がみられる。③、⑤、⑥は③→⑤→⑥の順序で剥離されており、これらは打面を転移させている。

#### 接合資料11 (第47図)

A区の一括で取り上げた石核1点とVI層出土の剥片3点の計4点が接合している。調査区のほぼ中央をはさんで東と西に分布している。これは耕作による削平の影響とみられる。石材は流紋岩源のホルンフェルスである。剥離順序は①→③の順序で剥片剥離が行われ、④との前後関係は不明である。打面転移を行いながら剥片剥離を進らせている。

#### 接合資料12 (第48図)

A区のIX層出土の剥片1点とVI層出土の剥片3点の計4点が接合している。調査区の西南部に分布している。層が乱れていることから第Ⅱ文化層と考え

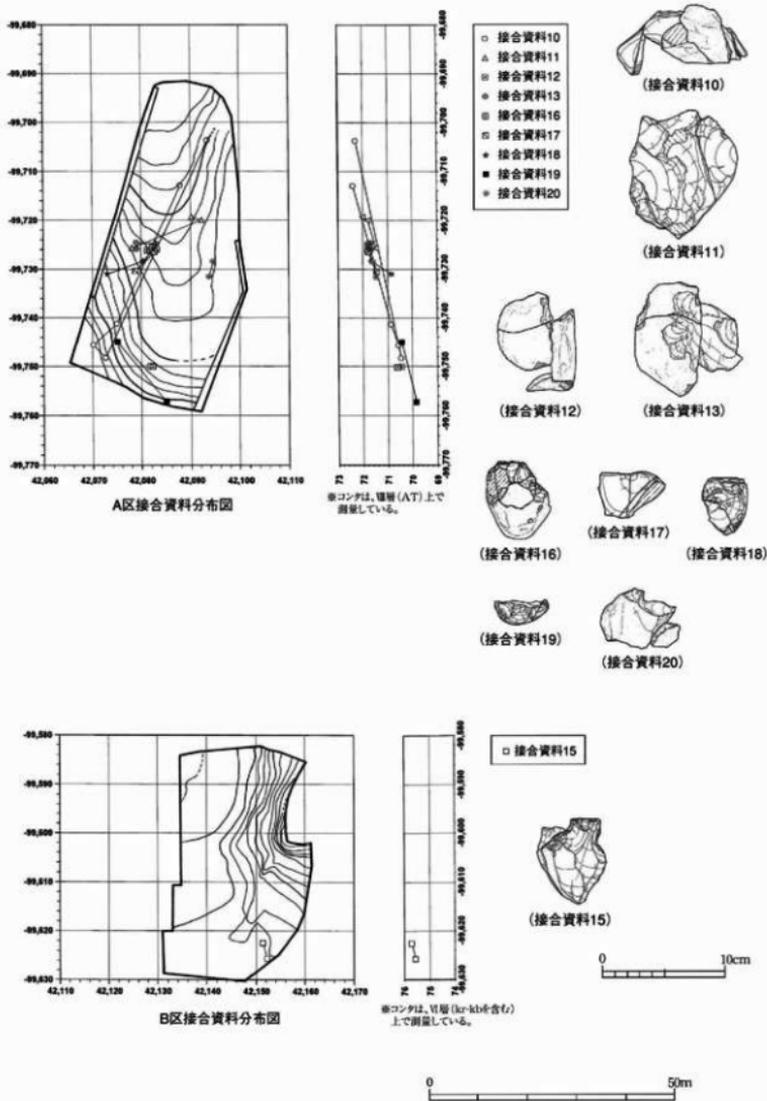
ている。石材は頁岩である。③と④は節理面に沿って分割されており、②も節理面が確認されるなど剥片剥離の進行があまりスムーズではないようである。①は②に先行して剥離したときにステップを作り出している。

#### 接合資料13 (第48図)

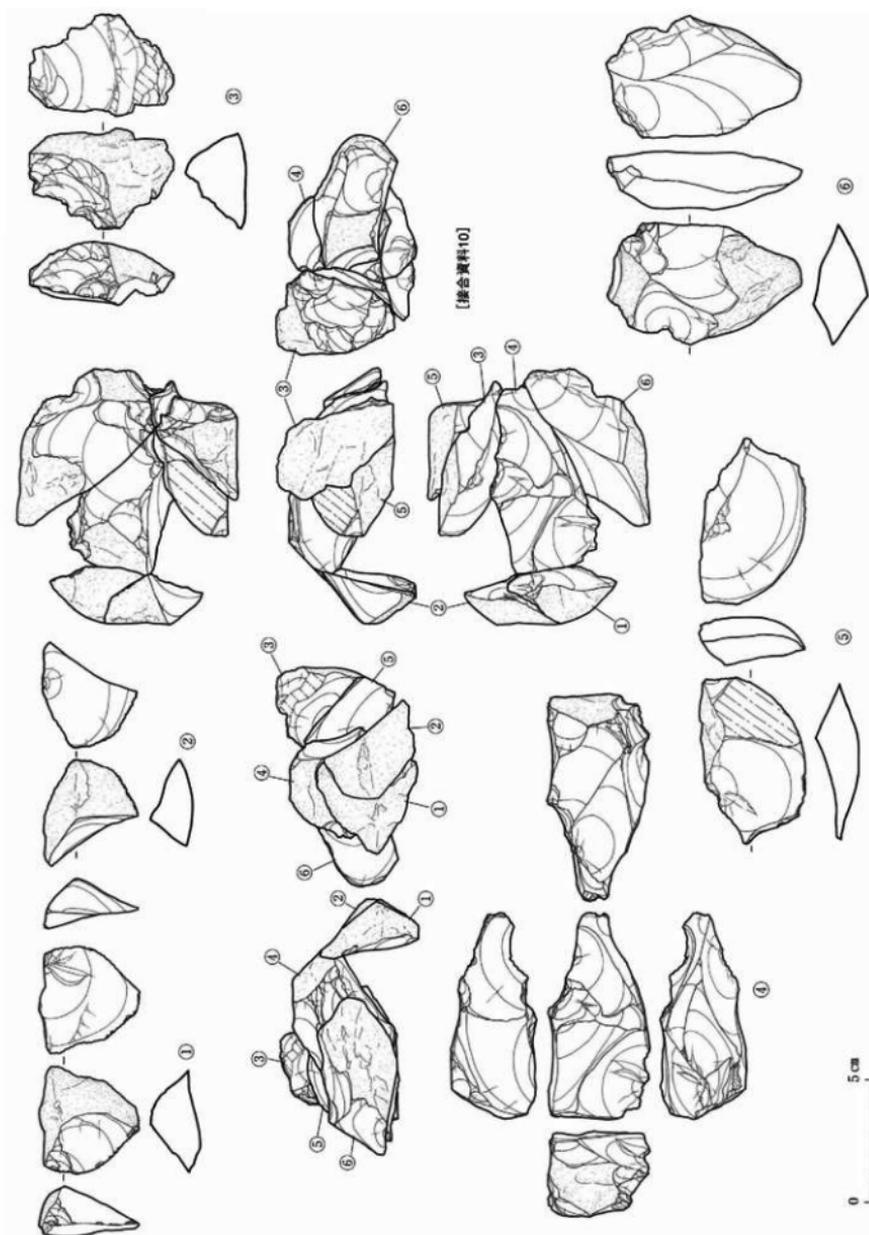
A区のVI層出土の剥片が2点接合している。調査区中央の西側部分に分布する。石材は流紋岩源のホルンフェルスである。剥離順序は①→②の順序で剥片剥離が行われており、打面を少しずらしながらの作業である。①は何らかのアクシデントによって分割されている。

#### 接合資料14 (第49図)

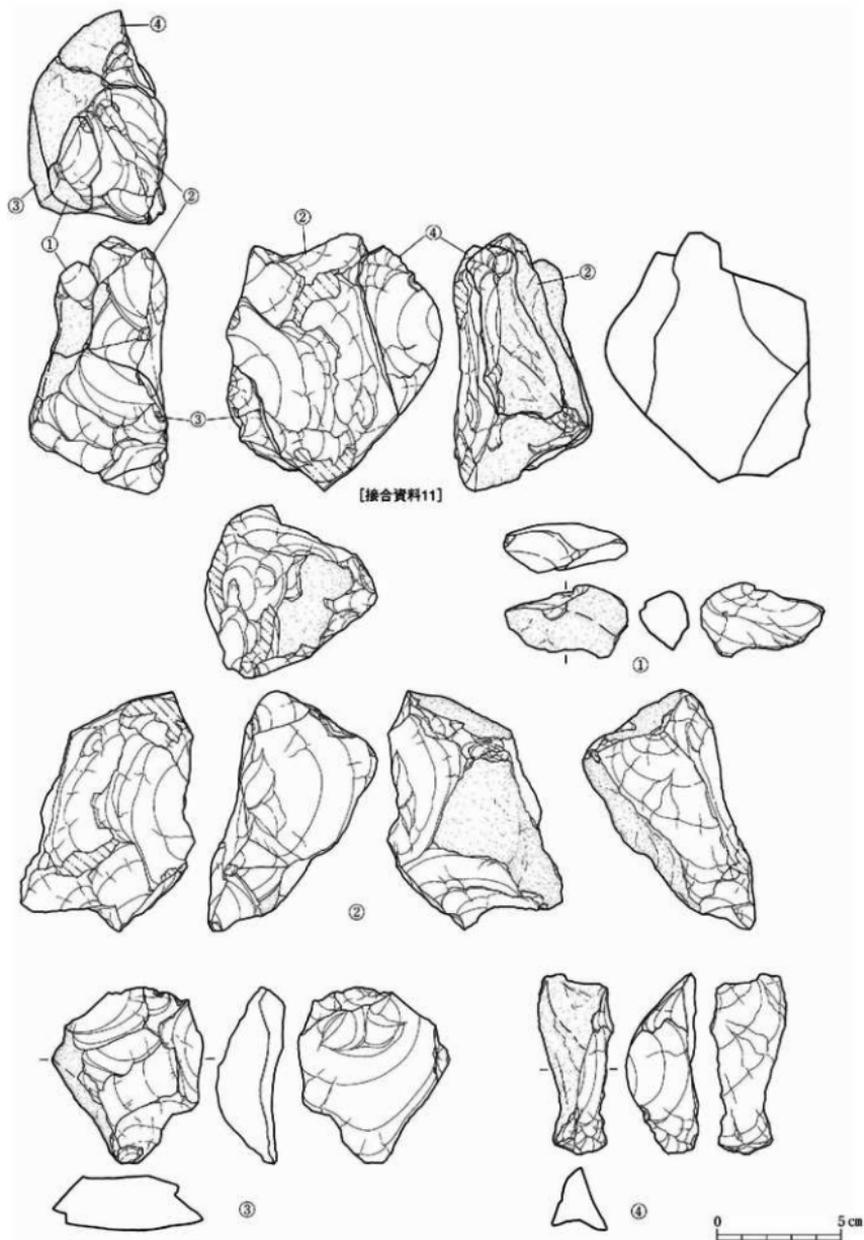
A区の一括で取り上げたスクレイパー(?)1点とVI層出土の剥片1点の計2点が接合している。調査区の中央と中央から東側に分布する。石材は砂岩源のホルンフェルスである。剥離順序は①→②の順序で剥片剥離が行われている。①の下縁部に連続的な調整が確認され、スクレイパーの可能性もある。



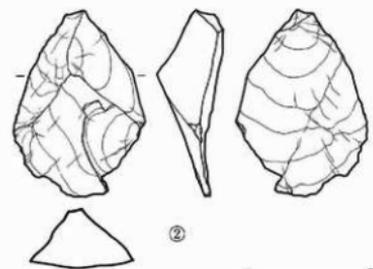
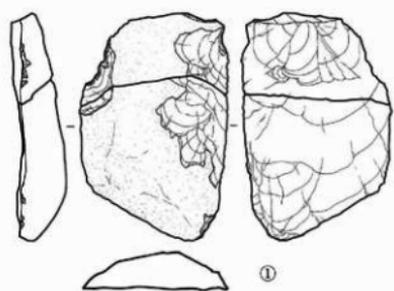
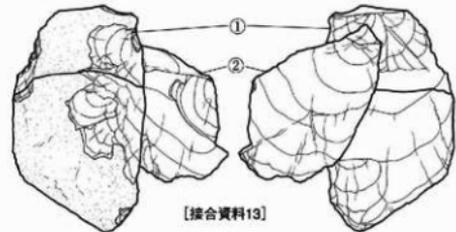
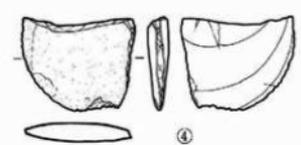
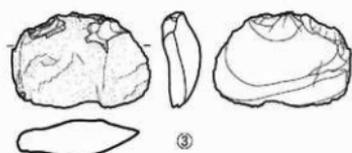
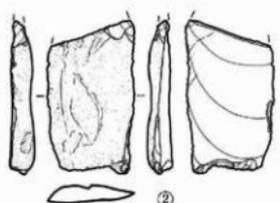
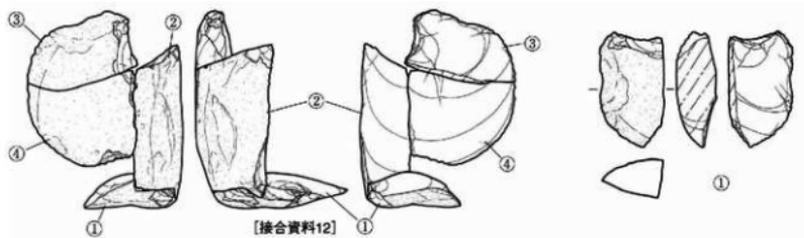
第45図 接合資料分布図〔第Ⅱ文化層〕(S=1/1,000)



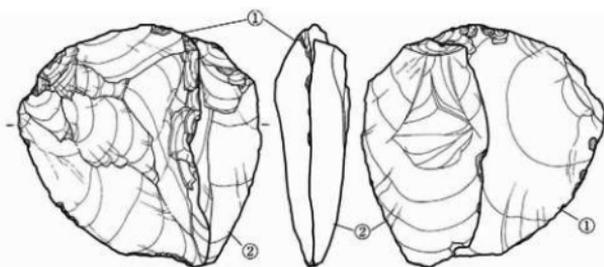
第46圖 接合資料10家測圖



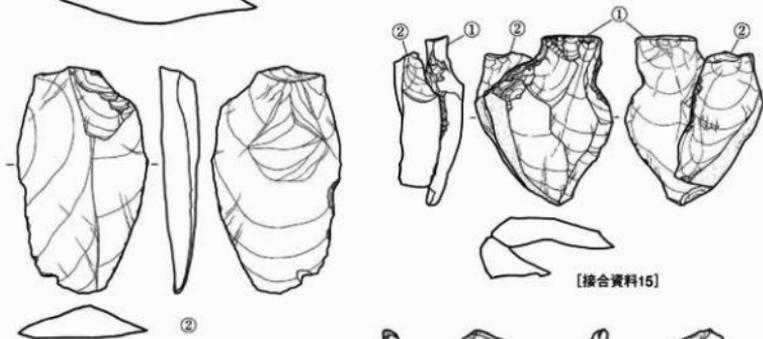
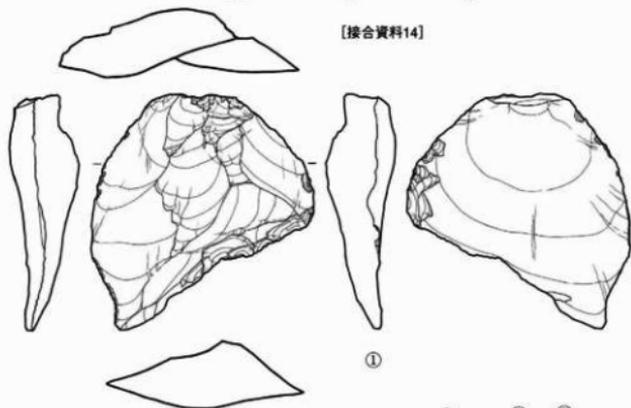
第47圖 接合資料11実測圖



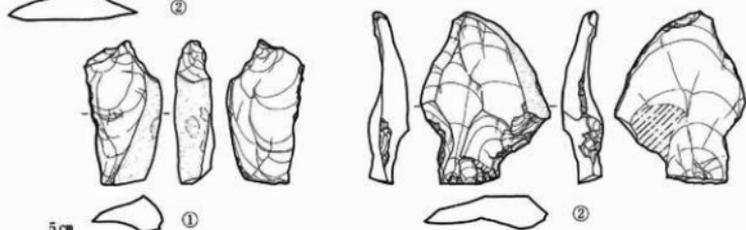
第48図 接合資料12・13実測図



【接合資料14】

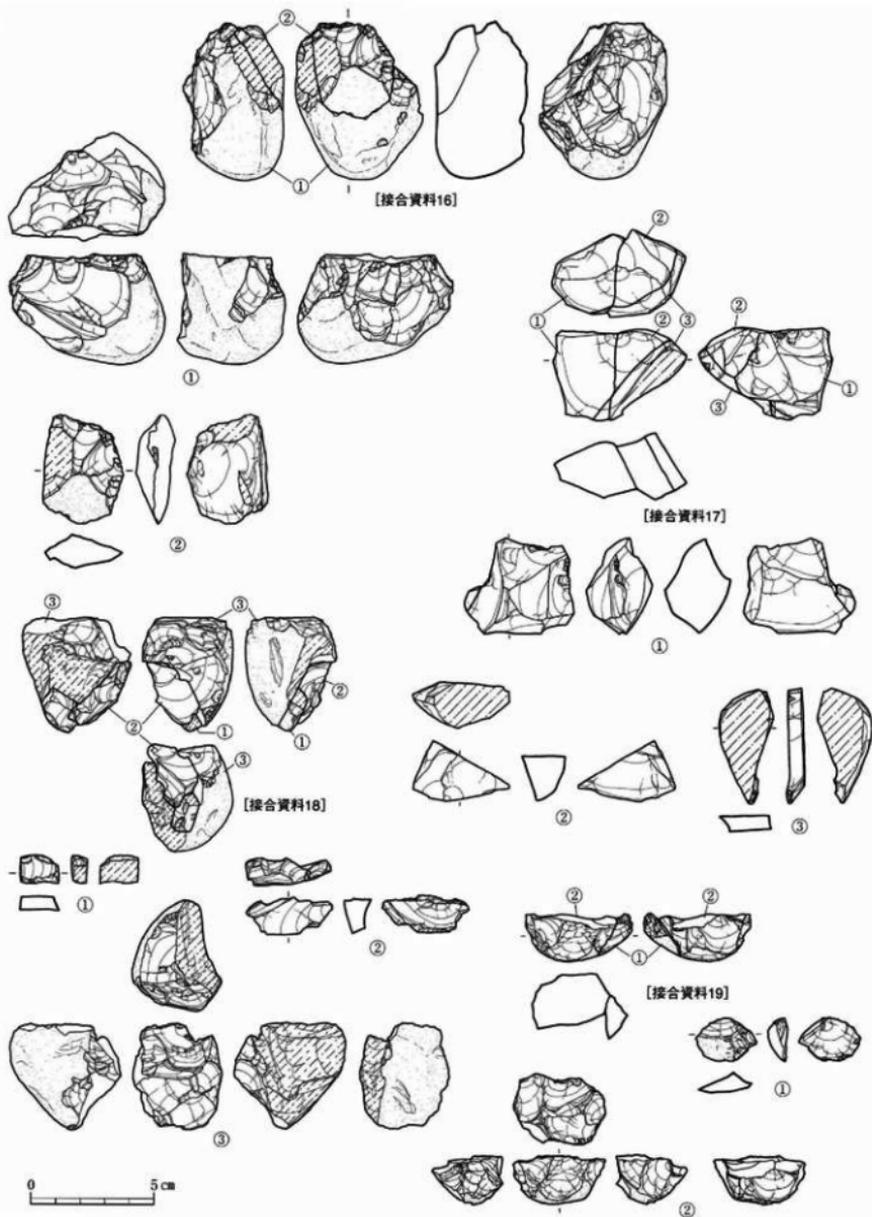


【接合資料15】

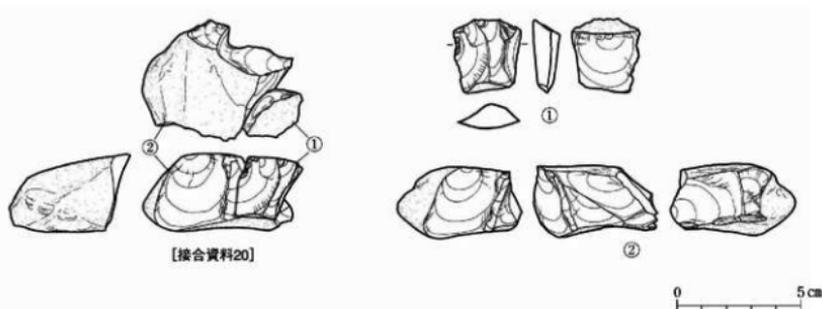


0 5 cm

第49圖 接合資料14・15実測図



第50圖 接合資料16・17・18・19実測圖



第51図 接合資料20実測図

#### 接合資料15 (第49図)

B区のVI層出土の剥片1点と剥片尖頭器1点の計2点が接合している。調査区の南端の平坦部に分布する。石材は珪質頁岩である。剥離順序は②→①の順序で剥片剥離が行われている。②は剥片尖頭器である。先端は鋭利状に欠けるが、抉りの入った基部に丁寧な調整が施される。

#### 接合資料16 (第50図)

A区のVI層出土の石核1点と剥片1点の計2点が接合している。調査区の中央部に分布する。石材は珪質頁岩である。単設打面の石核から、剥片②が剥離されている。石核には階段状剥離の痕跡がみられる。

#### 接合資料17 (第50図)

A区のVI層出土の石核1点と剥片2点の計3点が接合している。調査区の中央部に分布する。石材は頁岩である。剥離順序は③→②→①の順序で剥片剥離が行われている。③は節理面に沿って剥離されている。

#### 接合資料18 (第50図)

A区のVI層出土の石核1点と剥片2点の計3点が接合している。調査区の中央部から西側に分布する。チャートという剥離の難しい石材のため、2点の剥

片には目的的な剥片を剥離しているとは言い難い。石核自体に節理が多く残存しているので剥片剥離をさらに困難にしている。

#### 接合資料19 (第50図)

A区の客土中出土の石核1点とVI層出土の剥片1点の計2点が接合している。調査区の南端に分布する。剥片剥離がかなり進行していると思われ、石核②はむしろ残核の性格が強い。打面転移が頻繁に行われている状況である。

#### 接合資料20 (第50図)

A区で出土した接合資料である。出土した層はVI層とVII層であるが、石核1点と剥片1点の計2点が接合している。自然面がかなり残存した石核で、打面転移を繰り返しながら剥片剥離が行われている。①の剥片の打面には自然面がみられる。

#### 【石器】(第52図～第59図)

後期旧石器時代第II文化層の遺物は、VIII層、VII層、VI層から出土している。

83～87はA区の第VIII層から出土している。83はナイフ形石器である。石材は流紋岩である。II類のaに属する。先端がわずかに欠損している。84は使用痕剥片である。石材は頁岩源の緻密なホルンフェルスである。85は細石刃である。石材は黒曜石であり、

下部を欠損している。86は残核であり、I類に属する。石材は頁岩である。87は敲石兼磨石であり、I類に属する。石材は砂岩である。

88～97はVII層から出土している。88～96はA区で出土した。88・89はナイフ形石器で、II類aに属する。88の石材は砂岩源の緻密なホルンフェルスである。89の基部の端は欠損面だが加工が施してある。SI102から出土している。石材は流紋岩である。90は角錐状石器である。小型でI類に属する。石材は流紋岩である。91・92は石刃である。91は裏面の右側上半部に二次加工が施してある。石材は頁岩である。92の石材は流紋岩源の緻密なホルンフェルスである。93は磨石である。SI102から出土している。I類に属する。石材は緻密なホルンフェルスである。94～96は敲石兼磨石である。いずれもA類に属し、広く敲打痕や研磨痕が残る。94はSI101から出土している。石材は砂岩源の緻密なホルンフェルスである。95はSI102から出土している。石材は尾鈴山酸性岩で風化している。96はSI102から出土している。石材は砂岩である。97は石皿である。SI102から出土している。流紋岩の楕円の礫を使用している。

98～130はVI層から出土した。98～126はA区から出土している。98～102はナイフ形石器である。98はI類bに属する。石材は流紋岩である。表面の一侧縁と裏面の一侧縁に加工を施している。対称の関係の部位に加工を施している珍しい例である。99～102はII類bに属する。99は基部がわずかに欠損している。石材は流紋岩である。100の石材は砂岩である。101・102の石材は流紋岩である。102はスクレイパーの可能性もある。103・104は角錐状石器である。いずれもI類に属し、石材は流紋岩である。105は剥片尖頭器である。I類に属し、石材は頁岩源の緻密なホルンフェルスである。右上部先端付近にも加工を施している。106は台形石器である。II類に属し、石材は流紋岩である。107～109はスクレイパーである。107・108はエンド・スクレイパーのI類に属し、石材は頁岩である。108は二次加工剥片の可能性もある。109はサイド・スクレイパーのI類に属する。石材は頁岩源の緻密なホルンフェルスである。110・111は二次加工剥片である。いずれ

もI類に属する。110の石材は流紋岩である。111は2つに割れた状態で出土し接合した。石材は流紋岩源の緻密なホルンフェルスである。112～114は使用痕剥片である。いずれもI類に属し、石材は流紋岩である。115・116は石刃である。いずれも石材は流紋岩である。115は石刃素材の使用痕剥片である。116は小石刃である。117・118は石核である。石材はいずれもホルンフェルスで風化している。117はII類に、118はIII類に属する。119は横長剥片である。石材は砂岩源の緻密なホルンフェルスである。120・121は細石刃である。120の石材は黒曜石であり、完形である。121の石材は頁岩で下部を欠損している。122は磨石である。I類に属し、砂岩源の緻密なホルンフェルスである。研磨痕が残る。123は敲石である。I類に属し、石材は砂岩である。敲打痕が残る、全体に赤化している。124・125は敲石兼磨石である。いずれも研磨痕と敲打痕が残る、石材は砂岩である。125はSI102から出土している。126は石皿である。SI102から出土している。尾鈴山酸性岩の楕円の礫を使用している。

127～129はB区で出土した。127はナイフ形石器である。I類aに属し、石材は流紋岩である。128は凹石である。石材は尾鈴山酸性岩であり、風化している。129は石皿である。石材は尾鈴山酸性岩であり、赤化している。

130はD区で出土した石核である。SI103から出土している。I類に属し、石材は流紋岩源の緻密なホルンフェルスである。

### (3) 小結

遺構として礫群を3基検出した。いずれもKr-Kbを含む褐色ローム層から検出された。礫は赤化しているが、集石遺構に比べると礫の広がりには疎であり、掘り込み面をもたない。接合資料の分布をみるとA区の中央部が空白地帯であり、遺物の分布状況も同様である。これは、後世の削平により第VI層が削平されたためとみられる。実際に、A区の南西部の客土中から石器などの遺物が出土し、接合関係がみられるものがあることから明らかである。